第 2 部

職員の震災活動の手記

災害現場から

パニック対応できず！

西消防署　警防第１係　消防士長　藤原　雅広

仮眠中に「ガン・ガン・ガーン」と言う音と共に身体が激しく揺すられ起き上がれず何が何だか分からなかった。

揺れが治まってから事務室へ行くと停電し、薄暗く非常灯だけがついていた。この明かりを頼りに事務室内を見ると、ロッカーは倒れあらゆる机の引き出しが飛び出しコピー機が落下いているのを見て大災害への危機を感じた。

やがてガス漏れによる警戒出場指令により消防タンク車が出動、続いて２台の救急車も出動して行った。私は当日ハシゴ車の乗組であったので残留員となった。非番職員への電話連絡と考えたが「ガス臭い」「家が倒れ生き埋めになっている。」等の駆け込み通報者が事務室へ入って来たので、受付へ行き駆け込み通報の対応に当った。

受付へは、ガス漏れ、家の倒壊による生き埋め者の発生、外傷患者の発生が主なものであった。また、額・顔面から血を流し見るのも無残な姿で駆け込んで来た人が多数あった。

「消防は何もせんのか。」「私を見殺しにする気か。」「何回も来ているのに、生き埋めになっている者が死ぬやろ！」【バカヤロー】等の罵声を頭がパニックになるほど浴びせられた。この状況に自分一人で対応するのは本当につらく、残留員でなく出場したかったと真に思った。

しかし、仲間も現場で一生懸命頑張っているのだと自分に言い聞かせ、この苦情及び通報内容を一件一件処理し内容を必至に記録、通信指令室と災害対策本部へ報告した。

夜明けと共に駆け込み通報は減少した。今後この様な大災害はあってほしくはないが、もしあれば消防署への駆け込み通報は必ず多数あると思われる。

残留員による情報の収集、傷病者への応急処置等を考慮すべきと考える。

新任にして大体験

西消防署　警防第２係　消防士　的場　吉彦

私の育った町には来ないと思っていた天災が、消防に入って間もない私にふりかかった。非番で家の３階に寝ていた私は、「ドーン」と言う音と共に縦に横にと激しい揺れで叩き起こされた。家族の安全を確認後署へ行かねばと思った。車も自転車も倒れブロックに押し潰されていたため自力で署まで走って行くしかなかった。

無我夢中で走った。署に着いてすぐ受付で市民の駆け付けの対応に当った。「今消防車は全車出動しています。順番に職員が対応していますので…」と状況を説明しても皆パニック状態であった。「早くせんか!!」と私の胸ぐらを掴む市民もいた程である。

「家屋倒壊に伴う生き埋め発生」との指令がはいり、いよいよ現場活動に加わるのだと気を引き締めた。

目的の現場に着くと私は目を疑った。何と２階建てのアパートが１階建てになっているではないか、この下に人が、ガスが漏れている音もする。早く助けねばと気が焦った。少ない資機材で声を頼りに恐る恐る床を捲る。

崩れた土を掘り起こす度に砂塵が舞い上がり目も喉も痛い。

周囲の市民の協力を得て３名の子どもを救出した。

しかし、この子ども達の親は手を宙に差し出すようにして死んでいた。子ども達を守るため限界まで身体をはったのであろう。悲しみと絶望感が沸いたが救助活動はまだまだ続いた。

数々の救助活動から感じたことが数多くあった。１つには消防学校で学んだ消防組織法、消防法の任務目的を身体で感じることができた。また、先輩方の姿からチームワークの大切さを学んだ。人と人との助け合いの美しさ、自然力の驚異等…不幸で最悪の出来事であったが、今後の私の消防人生に大きな影響をもたらすものと信じている。この経験を基に消防の役に立てる人間になる様努力したい。

「我が家の全壊を顧みず防災活動」

西消防署　宝松苑出張所　警防第1係　消防司令補　植田　省三

激しい揺れにベッドからたたき起こされた。

足の踏み場もない事務所。消防車も車止めを越えて移動している。急いで車載無線機のスイッチをいれる。街の明かりも暗く妙に静まりかえっていた。

車で通りかかりの人から、湯本方面でガス臭がしていると通報があり、確認の為出動。

無線の対応が無い。走行中高司５丁目の建物火災を受信、ガス漏れも気になるが火災現場へ向かう。停電で街は真っ暗、市役所を通過してから道路の状況が悪く感じられ、白らみ始めた東の空の下に普段と違った街並みが現われ始め、事の重大さに身の引きしまる思いがした。

幸い火災は大事に至らず消火ができたが、付近の消火栓は全部ダメで、本管１カ所の消火栓から取水できたのが幸運だった。

消火作業中、隣の牧舎で父親が不明という駆け付け通報があり出動。牧舎が倒壊、乳牛は索ながれたまま下敷きになったり、付近をウロウロしている。

息子の呼び掛けに応答があり救出にむけて屋根を破り稲ワラを取り除く。見る間にワラの山ができる。もどかしい、もうもうたる埃の中マスクも無い。

呼び掛けも乳牛の呻き声に掻き消されてしまう。天井や梁、柱のため近づけない、バールやガン胴ノコギリでは歯が立たない。救助工作車からエアーマットを取り寄せようやく救出。救急車で病院搬送となったが、人間だけでなく他の動物も多く犠牲になったと思った。

その頃ようやく本部の無線による指示が入り始め、順次救出現場に向かったが、家の建ち方や方向により損壊の程度が違う、大きな入母屋の瓦葺の家はほとんど全壊であった。

太い梁、柱が無残にも表れ、背筋が寒くなるのを覚えるが、救出に時間がかかる。早朝のため布団の中の人が多くその上に瓦や壁土、梁、柱等が積み重なっている。

布団ごと引きずりだす、身体に傷のない人、顔がうっ血している人等いろいろだった。救出しても救急車の手配ができず、消防車で搬送する、家族や友人が必死で呼び掛けるなか、応急救護所へ搬送、トンボ返りで次の現場へ向かう。現場到着するも既に付近の人達によって救出、病院へ搬送されていることが多く、いざという時、市民の協力が無ければできない事を痛感した。

昼頃になって家族の事が気になったが、連絡のない事は無事な事と思い、新たな救出現場に向かう。

途中雲雀丘方面で建物火災を受信、売布から中山へ旧176号沿いは電柱が傾き6階建のビルが道路側に倒壊している。それを過ぎた交差点から我が家を見ると2階建が平屋になっており、家族がガレキのかたずけをしているのを見て思わず「皆無事か」と声を掛けた。長男が両手で「マル」を描いた。

家は潰れたが家族は無事と確認できた。多くの倒壊現場を見てきたためか、その時も悲愴感等は感じず、気持は火災現場へと向いていた。火災はボヤ程度で消火されていた。家屋や電柱の倒壊、橋や道路の陥没のため通行止や迂回路を確認しながら署に向かった。

午後になると停電が復旧し、漏電かショートと思われる火災が発生、現場は道路も狭く走行が困難と予想した消火栓は使用不能、遠くの溜め池に部署のためブロック塀の上を通り、障害物を取り除き現場へ。目の前で黒煙が激しく上がる。気持ちはあせるが車は進まない。市民の方の協力を得てやっと部署できた。消火作業中も近隣の人が自宅のガスが臭いので見てほしい、また、倒れかかった家の筋カイの除去についても協力要請を受ける。撤収時にも電気、ガス水道の復旧等の相談を受けた。

夕方になってようやく災害の要請もおさまり出張所待機となった。出張所は電気も復旧しており、TVをつけると他都市の震災状況を放送していた。当市を上回る災害となっており、燃えるままの火災、倒壊した家々やビル、消火や救出を待つ人、避難者の人達、現有の消防力だけでは対応不可能な災害であった。

当市においては、市民の方々の献身的な協力によって幸いにも当日中に救出が完了することができた。

この災害活動を通じて、救助資機材の不足を感じ、災害に則した装備の必要性を強く感じた。この貴重な体験を今後の活動に生かしたいものである。

市民の方も災害について認識を新たにされたことと思う。この機会に自主防災組織の推進に努めなければならないと強く感じた。

憎むべき大震災

西消防署　警防第2係　消防士長　宮本　政信

地震の起こった、1995年1月17日05時46分は週休日で神戸市の自宅の2階で就寝中であった。何が起こったのか分からない、激しい縦横への揺れでびっくりして目を醒ましたが立つことができない、布団をすっぽりとかぶり1階で寝ている家族の名前を呼ぶのが精一杯だった。大型のブルドーザが飛び込んで来たのかと思った。

揺れが治まって直に飛び起き、家族の安否が気になり1階へ降りるため廊下へ出て踊り場まで行くと階段は無くなっていた。ここから家族の名を呼ぶと元気な声で「皆大丈夫」と返ってきたが、「でも、ここから動けない。早く助けて」と次の声がした。これは大変なことになっている早く助けねばと気が焦った。取りあえず2階南側の窓を開け外に出たが、1階部分が完全に倒壊して2階建ての家が1階建ての家の様になっているのを見て唖然となった。家の心配より家族、と頭を切り替え、家の中に入ろうとしたが、1階の玄関及び窓は完全に潰れていたので、2階の畳を捲り妻達が寝ているところへ行くこととした。必死に畳を捲ろうとするが、焦りと道具がないため思うように作業は進まない。歯痒い思いをしていると、義父、義兄や近所の人達が来てくれ皆で協力して無事に妻子を救出することが出来た。救出してから義父、近隣者共に六甲小学校の体育館に避難した。

その後、家族を体育館に残し倒壊した自宅に戻った。近所の人から、「君のいとこの家が潰れて、生き埋めになっているそうやで」と教えられた。慌てて行ってみると、近所の人が沢山いて倒壊した家の柱、梁等を取り除きながらいとこ夫婦を捜してくれている最中であった。

私も直ぐに救出作業に加わり、ただ無事を祈った。

約1時間位経過したころ、やっといとこ夫婦が見つかったが、祈りの甲斐もなく夫の方は、意識なく、呼吸、脈拍も無しの状態でチアノーゼも出ていた。

人工呼吸、心臓マッサージをしながら、近隣を走行していた車を止め運転者にお願いして病院へ搬送したが二度と目を醒ますことはなかった。

病院から学校の体育館へ戻って妻にこの話をしていたところ、近くで黒煙が上がっているのが見えた。これは火災だと直感して、煙が出ている所へ行くと消防職員が消火作業をしていたので活動を手伝った。

学校へ再度戻ると、グランド内には人、車で溢れグランドの端で暖をとるため焚き火にあたっている人達、ケガをしてうずくまっている人が多数いた。

この光景を見ながら家族のいる体育館に入ると、ここも人、人が一杯で、皆が憔悴しきった顔つきで座り込んでいた。自分も同じような思いであったが、「負けたらあかん！」と思い直し、今後のことについて、校長先生らと話し合った。

家屋等被害調査に従事して

西消防署　専任職主幹　消防司令長　吉居　五雄

誰もが「悪夢であれば」と思う大災害のショックから未だ立直れない状況下、３月から５月末までの３カ月間、震災に伴う家屋、家財等の被害状況調査が実施された。この調査は市税の減免措置の資料とするために実施されたものである。

調査対象は、宝塚市全域（西谷地区を除く）約60,000棟73,000世帯である。

調査員は、企業（約25社）のボランティア50名の支援を受け、本市職員50名とのペアで50組が編成された。消防職員も家屋等の調査へ延べ25名が、家屋の損壊判定へ３名が従事したが、私もその一人であった。

毎朝、担当課員から調査地区が指定され調査をスタートする。現地には、徒歩、公用車、リース車、バス等を利用して指定された地域へ行った。

現地に着くと、家屋については、屋根、内外壁、建具浴室等の被害チェックからはじめ、家財については、食器類、電気製品、家具等家財全般からの被害割合を自己申告の聞き取りにより調査した。

この調査期間中の市民の声等を一部紹介する。

1　倒壊した家屋の人を思うと気の毒で、私のところはなんの被害もありません。ご苦労様です。（家屋等に大なり小なりの被害が予想されるのに…）

2　ここも、あそこも見て、良く見てよ。（被害を少しでも認めさせるべく。）

3　調査を終了して次の家屋へ移動中の我々を追って、申告漏れがあったと走って来る人。

4　調査を終了した家屋でも、納得がいかないと再調査を要請してくる人

5　震災から何日も経つのに調査に来るのが遅い。宝塚市の対応が遅い等不満を誰かにぶつけたい人。

6　調査時、家の中に入って細かく調査しなかったと怒る人。逆に家の中に入ったと怒る人。

7　被災者証明書の全・半壊の判定に対する不満を言う人。

等、気持ちが「休まる言葉」と「重苦しくなる言葉」があった。

何はともあれ大変な3カ月であった。寒い日も雨の日も休むことなく実施された。

雨の日は書類を濡らさないように気を使った。また、一日中歩き通しであり、中高層マンションの階段の上り下りは足腰にこたえた。

3月は、まだ風も冷たく、手がかじかんでボールペンが動かない。震えながら公園で昼食をとったことも。4月は、桜の花や木々の花が咲き、疲れた心を和ましてくれた。5月になると、さすがに暑く汗をかきながらの調査となる。季節の移り替わりをじかに膚で感じながらの調査であった。

種々辛いことの多い仕事であったが、消防生活だけでは経験できないものが沢山あった。

市職員、ボランティアの皆さんとのコミュニケーションからこの調査に対する思いや、平素の仕事への考え方等を学び取ることができた。

また、この震災では家屋等の物的被害よりも、精神的ストレスの方が高いことが良く分かった。

相手の立場に立っての接し方を学ぶこともできた。

人災は防止可能であるが、地震災害は予測も防止することも困難である。今後は、この大災害を教訓にして、物心両面の備えが必要である。

「二度とこのような大災害はあってほしくない」と切実に思う。そして、この様な調査が二度と実施されないことを祈る。

「紙コップ1杯の水」

東消防署　米谷出張所　警防第2係　消防司令補　福貴　正文

自宅で就寝中に激しい揺れで目を覚まし、家族の無事を確認した後勤務先の米谷出張所に向かいました。

6時15分、出張所に着くと当務隊は既に出動しており、作業服に着替えてガレージに出ると付近の住民が「子どもが生き埋めになっているから早よ来てくれ」「ガス臭くて爆発しそうや」などと叫びながら次々と駆け込んで来ました。

しばらくして非番員4名で小隊が編成され、出張所からタンク車で出動しました。

8時18分、売布東の町で老人が倒壊した家屋の下敷きになっているという情報をもとに混乱のなかで現場に到着すると、倒壊というよりは爆撃でも受けたような惨状で瓦礫の隙間から老人の濃い紫色に変色した足先だけが見えていました。

一生懸命に瓦礫を取り除きましたが、ノコギリとバールでは思うように進みません。そこへ近隣の造園業者がクレーン車で応援に駆け付けてくれ、やっとの思いで遺体を引き出すことができました。

引き続き11時18分、芦屋市への応援出動指令を受けました。宝塚市はもう大丈夫なのかと気に掛かりましたが、芦屋市は余程ひどい状態なのだろうと思いながら向かいました。

西宮市内に入り、国道171号線を走行し門戸の高架橋に近づくと阪急電車の線路上に高架橋が落下しており乗用車が途切れた高架橋の下に落下横転しているのが見えました。

迂回を重ねて国道43号線に入ろうと右折すると目の前に阪神高速道の高架道路が落下しており、この凄ましい光景を目のあたりにして改めて今回の地震の大きさと被害の大きさを痛感しました。

国道43号線は通行止めとなっていましたが、緊急車両であるため現場の警察官がバリケードを除けて通してくれました。

芦屋市内に入ると被害状況は更に凄まじく、国道

43号線は途中から走行できなくなりました。

止むなく住宅街の道路に入ると、いたるところで家屋や塀が倒壊して道路を塞ぎ、芦屋市消防本部の庁舎が近くに見えてからも辿り着くまでに何度も迂回しました。

12時20分、芦屋市消防本部に到着すると精道町の3階建てマンションの火災現場に出動するよう指令があり、広報車の先導で現場に急行すると1階部分は完全に押し潰されており、1階から3階までが炎をあげて燃えていました。

芦屋消防1隊が消火活動中で1階に逃げ遅れ1名有りとの情報を得ていましたが、救助の手だてもなく消火活動に専念しました。

16時40分、芦屋市消防本部に引き揚げ、待機室に案内されカンパンの支給を受けました。

思えば早朝に出動してから夕方まで全くの飲まず食わずでしたので有り難くいただきました。しかし、断水のため飲み水はなくやっと手に入れた紙コップ1パイのミネラルウォーターを隊員4人で分け合って飲みました。

次の出動は、津和町の木造家屋の倒壊現場との指令を受け現場に急行したが、街区全体の家屋が倒壊している状態でした。

家屋の下敷きになっている2名の遺体を家族の案内で確認しましたが重機の手配もつかず、人力ではどうすることもできないため、遺体の収容を断念しました。何もできず、ただ遺体に向かって手をあわせて拝むしかなく本当に悔しい思いをしました。

この後、清水町の建物火災、宮川町の家屋倒壊現場に出動し、23時40分に芦屋市から応援解除の指示を受け芦屋市消防本部を引き揚げました。

帰路は国道2号線を走行しましたが、道路は損傷が激しく突然10センチ程の段差があったり、上からは電気や電話線が垂れ下がっていたりしており全く気を抜けない状態でした。交通渋滞もひどく、翌18日の2時16分にようやく米谷出張所に帰り着き長い1日を終えました。

歯痒い救助活動

東消防署　救助第2隊　消防司令補　芝　　雅視

非番日であった1月17日午前5時46分、自宅（三田市）で就寝中「ゴー」という音で目が覚めた。

その時、激しい揺れが襲い「あっ地震だ」と思ったが起き上がれず、ただ布団の中で揺れが治まるのを待つことしかできなかった。

ラジオのスイッチを入れると、「ただいま関西地方で地震がありました、大阪、京都が震度4、神戸の震度はまだはいっていません。」とのアナウンサーの繰り返しであった。

まだ夜も明けていない中、家を出て自宅及び付近の住宅の被害状況を確かめたが、倒れている家はもちろん、屋根瓦のずり落ちている家も周囲にはなく、これは大阪方面が震源地かと思った。

6時半ごろ家に戻ると、妻が震源地は淡路島で、神戸がひどい被害らしいと言うので、「今から仕事に行く」と自宅を自家用車で出掛けた。

これが厳しく、長い長い一日の始まりであった。

三田市から宝塚市北部の西谷地区を通って勤務地に向かったが周囲の家は昨日と何ら変わらずに被害

は見受けられない、まだ早い時間帯であったので車の数も少なく、スムーズに十万道路を越えて御殿山の市民会館を過ぎた付近で、私の目の前に2階建ての住宅が道路上に倒壊しているのが飛び込んできた。

歌劇場前交差点から旧国道を東に向かったが、川面、清荒神、売布地区の道路沿いの木造住宅は被害が激しく阪急中山駅南側の交差点で渋滞の中、鉄骨のマンションが傾いている姿を見たとき、これは神戸もひどいかもしれないが、宝塚もひどいと体の震えがとまらなかった。

8時前に消防署に到着、多数の市民が頭や腕から血を流し食堂や事務所にうずくまっている。

職員の「もうパニックです。」の声に未曽有の大惨事だと悟った。

東署の受付に指揮本部が設置されており、地図上救助要請を示す付箋が二十数枚貼りつけてある。どれから手を付けようかと思っていたとき、駆け付けてきた市民が「倒れた家から煙が出ている。」と通報してきた。

地震の後は火事が一番怖い、神戸が今その状態だ、非常参集してきた職員5名で小隊を編成しポンプ車で出場した。口谷地区で倒壊して道路を塞いだ住宅のガレキの間から黒い煙が出ている。早速、消火栓に部署、ホースを延長して消火活動を実施、このとき消火栓は使用可能であった。その後、木造2階建て住宅や共同住宅の倒壊による救出活動を行った。ポンプ車に積載している器具は、バール、ノコギリ、ジャッキだけであったため、人海戦術により、付近住民からジャッキを借用し、崩れた棟木、家具等を持ち上げ要救助者を引きずり出した。

しかし、これでは今現在の要請事案をすべて完了することはできないと判断し、せめてチェーンソーをと思い一旦帰署し資機材の調達を行った。

その後、一つの救助現場活動が終了すれば、次はあそこも、ここもと救助要請が相次いだ。

本部からも、「○○地区倒壊現場へ向かえ」と連続して指令が出たが、十分な救助器具の無いままでの移動が続いた。焦りの中で、「生きていてくれ」の願いをもって救出活動を続けた。

11時18分、現場にいた他隊に芦屋市への応援出動が指令され、私の隊には「○○地区アパートの倒壊現場７名が生き埋め。救助に向かえ」との指令があり現場に出動した。

１階部分は完全にペシャンコであり、都市ガスが噴出している状況下で救出活動を実施、あと１名の救出作業中、北側の住宅から黒炎が上昇しているのを発見、「火事だ!!」救出活動を中断し火災防ぎょのため、消火栓に部署したが、水が出ない「断水だ」、しかし防火水槽と池を頼りに中継体制で防ぎょ活動を行い、２棟の焼損でくい止めることができた。

通報のあった救助要請については発災後９時間を経過した15時にはほぼ終了をみることができたが、いたる所でガス臭が立ちこめているため広報活動を行った。

しかし、正確な情報を市民に伝達できない歯痒さから現場では感情的なトラブルも発生していた。

24時、厳しく長い１日が終わったが、救助活動の疲労感と興奮とが入り乱れ、汚れた体を洗うことも出来ず寒さに震えながら、まさか起こることはないという我々のおごりと地震災害に対する無力さを心から反省した。

今回の災害活動で得た教訓を今後に生かすことがわれわれの使命であることをいつまでも決して忘れてはならない。いや決して忘れられないであろう。

感動を１枚の写真に

東消防署　雲雀丘出張所　警防第２係　消防司令補　宇陀　公正

門をくぐると、数年前に見た荘厳な寺院は無残なガレキの山と化し、目前に大きく立ちはだかっていた。

先着消防隊などから情報を収集、２名が死亡、１名が生き埋めとのこと。

地震発生から、すでに５時間は経過している、要救助者は、１階で寝ていた高齢の女性、あまりにも悲惨な倒壊状態から生存の可能性はないと思った。

消防署、消防団合同で救助作業を開始、チェンソー、チルホール等を駆使し倒壊物を取り除くがなかなか作業がはかどらない。

寺院の屋根、建物が大きく東にずれ倒壊している、やっと１階に到達したが要救助者を発見することができなかった。

現状の破壊器具、人員では救出できない無理であるとの声があがった、いたずらに時間が経過して行く、早く救出しなければ…。

救出場所を西側に修正、再び倒壊物を取り除く作業を開始したとき、火災を傍受、作業を中断し出動する。幸いボヤ火災だったので、直ちに引き揚げ、救出作業を再開する。寺院の太い柱、棟木等が作業を拒んだ、チェンソーの刃が摩耗し切れない、活動は困難を極め隊員達が疲労し始めた。

そのとき、１人の消防団員が、小型パワーショベルでガレキの山を崩し、次々と倒壊物を取り除き始めた、流石に早い、近くの工事現場のものだそうだ、みんな疲れていたが疲れがふっとんだような気持ちになった。

小型でも人間の何十倍もの力で倒壊した柱等をいとも簡単に取り除いて行く、しかし生存している可能性もまだ捨てきれない、バリ、バリと音がするたびに「慎重に」「気を付け！」と作業に声をかけあった。

１階で寝ていたとの情報から、要救助者はガレキの底部と考え作業を進めていたが、予想に反して、ガレキの上部で布団の様なものを発見、ベットと判明した。

念のために消防署員が「お婆ちゃん」と呼びかけた。

「痛い、痛い…。」、生きているみんな驚いた！

倒壊物の少しの空間にうまく体が入り、またベットがクッションになったのだろう、奇跡だ。

「頑張れ！」「もう少しの辛抱や！」と声をかけながら、慎重に倒壊物を除去、ほこりをかぶった体が見えだした…。

救出！何時の間にか、みんなが拍手を送っていた。

この感動を残したい、忘れてはならないとカメラのシャッターをきった。

平成７年１月17日、悲惨で虚しい震災活動のなか、つかの間、やすらぎを覚えた。

出勤する前に救出を求められて

西消防署　宝松苑出張所　警防２係　消防士長　山田　健一

１月17日「ゴオー」という音と共に突き上げられるような感じがし、横揺れがしたかと思うと「バリバリ」とガラスの割れる音や柱が軋んで裂ける音がして生きた心地がしなかった。とっさにこれは普通の地震ではないと恐怖心が沸いた。数秒間は悪夢を見ている様で身体を動かすことができなかった。

残念ながら正に現実のことであった。余震に備えて早く家族を安全な場所に連れ出さねばと行動を起こす。寝室の敷居が頭の所まで垂れ下がり、手で開けようとしたが襖は動かない、とっさに足で襖を蹴破り先に妻を庭に避難させた。次に子ども達の安全を確認するため真っ暗な中、手探りで壊れた階段を上がり長女に「大丈夫か」と声を掛けたところ、「お父さん助けて、タンスに挟まれ逃げられへん。」と叫んだ。室内に入ると、タンスとベットの間に長女は挟まれていた。直ぐタンスを持ち上げ、その隙に長女は危機をのがれることができた。

長男は自力で室から出てきたので２人を連れて妻の待つ庭へ避難した。多くの人が屋外に避難していた。

自宅の裏に住んでいる姉の家族の事が気になり様子を見に行くと、ブロック塀が倒れているが家族は全員ケガもなく無事であった。一安心していると、遠くから「助けて下さい。」と私の方に女性が走ってきた。

事情を聞いてみると、「隣の伯母さんの家が潰れ、５人が生き埋めになっている。」とのことであった。

私は、まだパジャマのままで素足にスリッパという姿であり、非番召集のことも頭をかすめた。公の活動か、目の前の災害かと一瞬躊躇したが、目前で助けを求めている人を見捨てる分けにはいかぬと判断。その女性の後を追った。

その家は完全に倒壊し屋根しか見えない状態で、近隣の人々が屋根瓦を取り除き必死に救助活動をしていた。まだ、消防車が来ていないので米谷消防出張所へ駆け込み通報し、消防車に同乗し再度現場に戻った。

現場に到着した時には既に２名は救出されており３名がまだ家の下敷きになったままで、救助された２名から寝ていた場所を聞くと「家の北側です。」と答えが返ってきた。

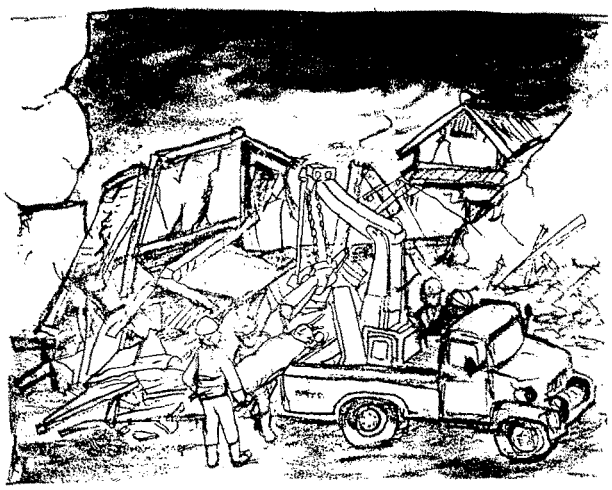
救助作業を開始後しばらくした時、なにやら女性が叫ぶ声が聞こえたように思った。皆に「静かに」…、「助けて！」とはっきりと聞こえた…。「生きている。！」「生きている！」と救助に当たっている人々が口々に言った。一気に救助活動が活気づいた。しかし、手作業ではなかなか思うように進まない。

他に手はないかと思いを巡らした結果、クレーン車での救出を考え、近くで作業していた植木職人に近隣の重機リースに行って借りてくるように頼んだクレーン到着までの間、下敷きになっている女性に「直ぐに助けるから、元気をだして！」と励まし続けた。クレーンが２台到着した。クレーンの力でこ

の女性は無事に救出することができた。皆の顔に一瞬笑みが零れたしかし、まだ2名の救出が残っている。皆の顔が引き締まった、先に救助した女性がいた横の位置で梁の下敷きになっている2名を発見した。直ぐに救出できたが、下敷きになってから数時間が経過しており、呼吸・脈無し最悪の状態であった。可愛い子供と中年の男性、孫とお祖父さんであろう、私は、悔しさと悲しみに胸がしめつけられる思いがした。

この後も家屋倒壊に伴う生き埋め現場へ米谷出張所職員と出動し救助活動に当たった。救助活動は13時頃まで途切れることなく続いた。生存で救助できた現場、できなかった現場さまざまであったが、この救助を通じて良い経験を積み学ぶことも多かったと思う。

特に、一般市民による自主防災組織の重要性、重機等の整備、情報ネットワークの充実、県外からの応援協定システムの構築等の必要性を痛感した。



「悪夢!!終わりなき小隊活動」

東消防署　中山台出張所　警防第1係　消防司令補　遠藤　　聰

……5時46分……

仮眠中に突然の激しい揺れ、それも今までに体験したことのない下から突き上げるような揺れであった。

最初は「自動車が庁舎へ飛び込んできた。」と思った。「ゴー」という地鳴りとともに、激しい振動が襲ってきた。ベッドから上半身を起こし、両手でベッドの枠をつかみ体を支えるのが精一杯で全く動くこともできなかった。

……5時48分……

激しい揺れがようやく治まり、ベッドから出ると停電していた。暗やみのなかを1階の事務所へ行き、懐中電灯の明かりで全員の顔を確認した。激しい地震、直後の停電、しかし通信指令室からの指令も本署からの連絡もない。とにかく情報収集をしなければと思い、車載の発電機でテレビをつけ、無線を開局すると共に、全員出動準備をしていた時、無線から南部出張所管内、高司4丁目「○○」付近の火災が流れてきた。

……5時53分……

これだけの激しい地震直後の火災、しかし出動指令がない。電話連絡も全くとれない。これ以外に災害は起こっていないのだろうか・・・なにか大変なことが起こっているのでは・・・言い様のない不安を感じながら・受け持ち区域の巡回と、次発火災の出動に備え28－PM（ポンプ車）、17－TM（タンク車）の2台の車両に7名で分散乗車し出動した。

無線で本部に出動を連絡するが、応答がない。更に不安が強まる・・・中山台出張所の周辺は、ブロック塀の倒壊や家屋の損傷もなく、阪急バスも走っており特に変わった様子はなかったが、中筋山手まで来ると強烈なガスの臭いがしてきた。そして阪急中山駅東側の踏み切りを渡ると周囲の状況は一変した。

……5時57分……

道路には亀裂が入り両側の家屋は倒壊している。

多数の住民が茫然と立ちすくんでおり、数人が消防車に向かって走ってきた。直ちに停車したところ「2人が生き埋めになっているので救出してほしい」との要請があった。

……5時58分……

救出活動にとりかかろうとしたとき、一人の男性が走ってきた。「国道沿いのS自動車ビルが倒れかけ、火災が起こっている。直ぐに来てくれ。」と言うことであった。一瞬、頭の中が真っ白になった。目の前の倒壊した家屋の下には2人が生き埋めになっている。そして200メートルと離れていないビルで火災が発生している。とりあえず、ポンプ隊4名で救出活動を続行するよう指示し、タンク隊3名でS自動車ビルへ急行した。

……5時59分……

S自動車ビルに到着すると、ビル1・2階が倒壊してビル全体が北側に大きく傾き、北側道路付近の3階開口部から炎が出ていた。周囲には消火器が5、6本散乱しており、4階の窓からはビルの住人が必死になって逃げ出しているところであった。

ビル北側の消火栓に部署したが、この時すでに断水していた。タンク水のみ放水した後、阪急中山駅の防火水槽に移動し水利部署、2名でホース16本を延長し、消火活動を実施、6時40分頃に消火した。

一方、家屋倒壊現場の隊は、人員、資機材の不足に苦しみながらも、付近住民の協力等により、7時58分に1人を救出、続いて8時53分に2人目を救出した。1人目は生存していたが、2人目は既に死亡していた。

救助活動にあたった隊員は、大量の瓦礫に対し、バール、トップマン、のこぎり等の資機材で立ち向かい約3時間で2名を救出した。

この後も、両隊とも数件の救助活動に出動したが、地震直後は、まさかこれほどの大災害が起こっているとは思わなかった。

今までに体験したことのない大きな地震であったが、中山台出張所の周辺で家屋倒壊や道路の地割れなどが全くなかったため、たった2キロしか離れていない阪急中山駅周辺の惨状を見た時は、驚きを通り越し悪夢を見ているかのようであった。

特に、今にも倒れそうな状態で炎上していたS自動車ビル、また、八幡神社や妙玄寺をはじめ多数の家屋が倒壊し住民が必死で救助を求めていた様子は、出動した隊員一人ひとりの瞼に強く焼き付いている。

「防災の主役は市民」

西消防署　栄町出張所　救急第1隊　消防司令補　藏野　正夫

平成7年1月17日（火）午前5時46分、震災対策想定を遥かに越えた都市直下型「阪神・淡路大震災」が起きた。

戦後、廃墟と化した街を、国民一人ひとりが汗と泥にまみれ、血の滲むようなひたむきな努力で築き上げ、完全復興したこの美しい街の大半が一瞬にして崩壊され、未だこの震災の爪あとは、痛々しく残り街の復興までには多くの時間を要する状況下にある。

私は、災害の少ない街で生まれ育ち、生活してきた。

この地で生まれて、初めて自然災害のエネルギーの甚大さに言葉で表現できない位の恐怖感を受け、走馬灯のように悪夢が脳裏をかけ巡っている現状であるが、震災後、未だ不自由な環境下、不安な精神的苦痛を受け、避難生活を強いられている方々を思

うと自分にとって、いや私の家族にとっては、不幸中の幸い、今生きている事にただただ感謝するところである。

北海道南西沖地震、雲仙普賢岳噴火災害を含め、過去幾多の大災害が発生した時、自分自身が一度でも被災者の方々また被災地に対してボランティア精神を持ち実行していったのか、ただただ傍観者的な立場であぐらをかいていたのではなかったのか。

この震災を通じどれだけの人々が被災者、被災地に対して「愛の手」を差しのべていただいたのか。それを思うと自分自身のちっぽけな人間が恥ずかしく自戒せねばいられない心境である。

当時のあらゆる関係機関、ボランティアの方々の活動を顧みるならば、施設、医薬品等が欠如した状況下で、多数の死傷者に対して「尊い命」の救命活動に全力を傾け取り組まれた医療関係者、連日連夜ライフラインの一日も早い完全復旧を目ざして努力をいただいた公共機関の方々の活動状況。

また、この震災で犠牲者となった家族を現場に残し、被災者のためその強い使命感、責任感で災害現場に立ち向かい、空しくも過労死された消防団員の方、更には、心豊かな一般の方々のボランティア活動。どれをとっても心の奥底から手を合わせ「ありがとう、ご苦労様」でしたと敬意を表し、人間愛のすばらしさを根底とし一生忘れることができない日々であった。

一方、行政機関に目を向けると市地域防災計画を見直し、本計画各章における方策、運用の確立を目ざし、生きた計画を推進せねばならない。

消防としても、この震災を通じて反省すべき問題点は山積みされており、各分野における対策の確立には時間を要するところであるが、市民の生命、財産を保護する上にも組織をあげ早期確立を図らねばならない。

特に救急分野においては、救命処置を必要とする傷病者に遭遇しながら通信手段が途絶したため、医師の具体的な指示を得られず救命処置ができなかった事実。火災時には、ライフラインが途絶し十分な活動ができないことは当然予測される明白な事実。

なぜこれらも含め制度化されなかったのかと断腸の思いが残るところである。

最後に「防災の主役は市民、行政は市民の行動を支援する。」このことを阪神・淡路大震災は教えてくれた。

「救える命を救うためには」

西消防署　救急第２隊　消防司令補　山田　茂樹

何やら寝苦しい夜であった。大きな「ゴー」と言う地鳴りが聞こえた。こんな時間に飛行機が落ちたのかと飛起き同室で寝ている妻、次男の体にかぶさった。

その直後に下から突き上げられ、更に東西に大きく揺れた。ジェットコースターにでも乗っているかのようであった。この世の終わりか！日本沈没か！長く感じた。

余震が続くので妻と二人の子供を誘導して屋外へ出たこの時、自分は一般市民なのか、いやそれ以下かもしれないと情けない思いをしていた。

それは、寝室には服はなし、懐中電灯もなし、頭を保護するヘルメットもなし「備えあれば憂いなし」の言葉は市民の前での格好づけでしかなかったのか…。

しかし、我は消防職員なりと気を引締め、近隣者への安全確認と火の元点検そしてガスの元栓を閉めるよう指導する。幸いにして近隣者に負傷者はなく家の倒壊もなかった。

地震の被害状況を得るために本部へ連絡したが電話が不通であった。家族の安全を確保した後に自主参集のため、いつもの経路で署へ向かった。

道路に変化はなし、小浜で1件家屋倒壊があったが、周辺には人影はなかった。

署に着くと警防課長から「無線が混信でだめや、電話も不通、非番員の召集が困難な状態や、ガス漏れ、家屋の倒壊による生き埋めが多数あるようだ。」と告げられた。

ガレージ内を見ると既にタンク車・救助工作車・救急車は出場していた。

これは自分が知らない所で多大な被害が発生しているのだと直感。先ずは予備救急車（53－KM）を災害出場可能な状態にすべきと判断し救急用資機材のパルスオキシメーター（BP306）を搭載、大災害用にと三角巾・ガーゼ等を詰めたバックを積載した。

予備車での出場を坊向隊長以下4名でお願いして自分は先発救急車（51－KM）に乗車し出場した。

第1現場の中筋4丁目に向かう途上において、八幡神社の倒壊、妙玄寺がぺっしゃんこ、道路(176号線）はでこぼこ新建築であるはずの○○自動車マンションの3階が1階になっているが如くに傾き、その南側住宅の家々のすさまじい倒壊状況を見て地震の恐怖を改めて体感した。

救急活動は延々とつづいた。この活動の中で感じたこと、思いに残ることは…

1　第1現場の傷病者は、現場到着時既に意識レベル3－300（深昏睡）・呼吸停止・脈拍触知不能・瞳孔散大・対光反射なし・ハートメイトECG（心電図）心静止・下眼瞼結膜点状出血が観察され外傷性窒息による死亡状態であった。この状態は他の現場でも観られた。家族に傷病者の状態及び多くの人が救急車を持っていることを説明し不搬送扱いとした。

家族の心情を考えると後味の悪い感はあったが、トリアージ（患者の判別）の原則を考慮すると正しい選択であると自分自身に言い聞かせた。

一つ一つの現場がトリアージの現場となった。

2　救命士が実施できる心肺機能停止者への特定行為は先の意味から実施できない。電話が不通で医師の指示が得られないのだから当然実施できない分けであるが現行の法規制では目の前で停止しても活用できない。当活動時に、もし目の前で心肺停止になったなら悔しい思いをしたであろう。

救命士を有効に活動させるために法の改正を強く望むところである。また、このような大災害時には通信指令室に医師の派遣を求め、救命士への指示を願う体制が必要であると思った。

3　救急告示病院を初め、宝塚市内の医療機関の全ての医師、看護婦等医療機関関係者に感謝。死者、重症患者など多数の傷病者を処置中にも拘らず、電話連絡する事なく救急車等で搬送した傷病者を快く受入れいただいた。どの病院も野戦病院の如く活動されていた。

4　生き埋め者を救助した救助隊員、警防隊員に拍手。苦い思いをした現場もあったようだが、救助された傷病者を引き継ぐ際には我が仲間に拍手を送りたい気持ちで一杯だった。

市内栄町1丁目9番地先の共同住宅倒壊現場で、生き埋めになっている22才の女性を栄町小隊と協力して救助した。(私が経験したただ一つの救助活動）

今、余震がくれば皆生き埋めだなと思いながらも救助する手に力が入った。彼女の体が梁から抜けた時は、こちらの体が震える興奮を覚えた。

5　避難所へ応急処置用資機材を早期に備えるべきであり市職員、市民に応急処置を普及しこれを活用できるようにしなければならない。ある避難所にて救急要請があり出場した。足首を捻挫した男性であった。この程度で救急車を呼んでと思っていたが、三角巾で固定処置をしてあげると「これで良い、楽になったから他の人のところへ行って

下さい。」と言われた。（心の中でさっきはごめんと謝った）この不搬送例からそう思った。

この地震を通じて学ぶべきことは、個人的にも組織としても多くあったことと思う。また、自然の力の巨大さと人の弱さを再認識できたことは不幸なことではあったが我々消防にとっては貴重な経験であったと思う。

同じ悲しみをしないため、反省すべきところ及び見直しすべきことには積極的な取組みをし、改善せねばならないと思う。助けられる生命を助けられるように！。

「頼もしい市民の顔、顔、顔…」

西消防署　警防第１係　消防司令補　安谷　智治

何が起こったのか言葉では言い表せない何とも不気味な轟音、そしてその直後に物凄い縦横への揺れが起こった。家ごと何処かに持っていかれそうな感じ、家財は家の中で好き放題に暴れ家族の身を襲っていた。

長男は、落下物で額を負傷し血を流している。長女は、タンスの下敷きになっていた。タンスを除去してやると無傷であった。妻も自分もお陰で無傷であった。

大きな地震であったが、家族全員の生命への危険はなかった。地震＝火災と直感し、家族に出勤する旨を伝えて家を出た。出勤途上家族の顔が浮かび後ろ髪を引かれる思いがした。しかし、私の仕事を理解してくれていることを信じ署へ向かう足を速めた。

署に着くと、当務員の残留は１名しかおらず、他の当務員は全員出場していた。

受付には、多数の負傷者、ガス漏れによる出動要請、家屋倒壊による生き埋め者の発生に伴う出動要請のための駆け込み者が来ていた。

残留者とこの対応に当たったが、出動したくても１台編成するだけの人員がいない。「爆発したらどうする、責任取れよ」「何回も来てるのに何時きてくれる、見殺しにする気か」等の罵声を浴びるがどうしようもない。

正にパニック状態であった。負傷者は事務所のソファーで休んでいただいた。

ガス漏れ、家屋倒壊現場は必死に記録した。残留者に記録した内容を通信室へ報告するよう指示した。

通信指令室から何度か救助出動の要請があったが、非番員の出勤がままならない。出動体制が整ったのは、震災から１時間以上経過した７時50分であった。

出動人員は５名、１台で出動した。場所は市内仁川月見ガ丘の共同住宅で生き埋め者が６名発生していた。

現場到着して、直ちに救出活動に当たったが、５

名という人員そして手持の資機材で立ち向かうには、余りにも大きすぎる瓦礫の山であった。救出活動は難行することは避けられなかった。ユンボ等の重機があればなんとかなるがそれを求めても直ぐには揃えるのは無理であろうと判断。付近の人々に頭を下げ協力を求めて人海戦術で対応しようと考えた。

平素であれば野次馬であろう人々が快く協力していただけた。最初は、3～4名であったが作業が進むにつれて20～30名の協力を得ることができた。この人海戦術で6名を救出することができたが、残念ながら2名は既に死亡状態であった。

引き続き、休む間もなく市内を救出活動のため東奔西走した。この救助現場活動で感じたことは…

1　消防1小隊の4～5名では何もできない。
2　救助活動に際しては、重機が必要である。
3　非番職員の参集が遅れた。
4　市民協力が有り難かった。
5　死者搬送車の確保。
6　無線が輻輳、情報収集、指揮命令等がスムーズに行うことができなかった。
7　自主防災組織の必要性。
8　長時間の活動従事のための燃料の確保。

等々であった。

今後このような災害はあってほしくないが、自然の力は何処に潜んでいるか分からない。皆無とは決して言えない。同じ轍を踏まないための取り組みが必要であると思う。

「女子大生救出」

西消防署　栄町出張所　警防第1係　消防司令補　上田　秋夫

今回発生した直下型大地震では、多数の災害現場に出動し、さまざまな体験をしましたが、その中で一番印象に残っているのが、栄町1丁目にて発生したアパート倒壊による生き埋め事案です。

内容は、地震発生当日の午前9時ごろ、当務員はすでに災害現場へ出動しており、非番員3名で待機していたところへ、一人の市民が「アパートの下敷きで女性が生き埋めになっている。」との駆け込みがありました。

私は、隊員と一緒に現場に急行し倒壊建物を見たところ、1階部分は完全に倒壊し、2階部分は1階部分に折重なるように崩れていたが、辛うじて残存している状況でありました。我々は早々検索のため屋内外をくまなく調査しましたが、助けを求めるような声をキャッチできなかったので、我々は他の現場の状況を無線で傍受し一旦は引き揚げようと考えましたが、アパートの所有者が「確か、1階に住んでおられる女子大生が生き埋めになっているので助けてあげて下さい。」と涙まじりで必死に訴えてきたので、我々は再度検索を試みようと倒壊した屋内に進入し、大きな声で「いるか。いたら返事をしろ。」と呼び掛けたところ、押し潰された瓦礫の下から「助

けて」と女性のかすかな声を聞き取ることができたので、隊員は屋外で状況を見つめていた市民、市職員に対して「いたぞ」と大きな声で知らせ、直ちに救出活動を開始することとなった。

最初は、どのような方法で瓦礫を除去しようかと困惑しましたが、現場には十分な資機材が整っていなかったので、人力で活動しなければならないことを頭に置き、先ず2階部分の床を剝がすことから始めました。作業する隊員も少なく、体力にも限界あると感じていた時、市の指定業者である月山建設の作業員が到着しており、この人達の労力を借りる事にした。迅速、安全に作業を進められるのを見て、常日頃からこのような作業に従事されているからだろうなと感心する一幕もありました。

我々は、従業員と協力しながら活動を実施し、その状況の変化に伴い本部通信指令室へ逐次報告と救助応援要請と負傷者の搬送準備を整えておくため、救急車の事前待機を要請しました。

救出活動は続いているが、作業をする者の疲れは隠せない。時間が刻々と過ぎて行き、生き埋めの女性の安否も気がかりとなり「頑張れよ、もう少しの辛抱や、絶対助けるから」と姿の見えない要救助者に、一心同体の気持ちで勇気づけの言葉をかけながら、状況を確認するが、時間が経過するにつれ、声が小さくかすれ声になり衰弱している様子が伺えた。救出活動する者にとっては、気ばかりがあせり一向に作業が進まないことに腹立たしさを感じてきました。

そして活動から2時間後、2階床のはぎ取りが終了した時ようやく1階部分が見えました。

隊員の「いたぞ！」という声に全員が「よっしゃ」と声を揃え「もう少しや頑張って全力で続けよう。」と改めて協力を促しました。

それから1階部分の収容物を掘出し始めたが、部屋中に沢山置かれた荷物が押し潰されており、作業は困難を極めていました。

しかし、要救助者の姿を見て「恐怖心から早く解放させてあげたい」と思えば気を緩める事はできないと隊員に命令し、使命感を奮い立たせました。

そして、3時間後全員の協力と努力で無事に救出し、救助活動に協力していた救急隊に引き継ぎ、救命士による適切な応急処置の後、最寄りの病院への搬送となりました。

このような体験の中で、救助活動を行う者同志の団結協調性、責任感がいかに大切であるかが立証されあらためて再認識させられました。

また、資機材が不足していても工夫をすればどのような状況下であっても対処できるものであると痛感しました。このような気持ちの中で、瓦礫の下で恐怖との戦いだった要救助者の救出した時の安心と非常に感謝し喜んでいた美しい顔を今も忘れることはできません。

「市民の罵声を力に!!」

西消防署　南部出張所　警防第2係　消防司令補　石塚　京一

平成7年1月17日午前5時46分ごろ、自宅の2階で寝込んでいたところ、ドドーンと突き上げるような揺れを感じたと思った途端、家具が倒れ間一髪で隣室へ逃げ込んだ。揺れが治まるまで待った。数10秒間揺れた後、家族（4人）全員で1階へ降りた。

1階の各部屋は家具類の転倒、テレビ等の落下、食器類の散乱である。この時、初めて地震の恐ろしさを知らされた。1階の非常用電灯を持って、全員で屋外に出た既に近所の方は屋外に避難していた。怪我人はなかった。また、家屋の倒壊はなかったが、屋根瓦がかなりずれている家屋は数軒見られた。間もなく消防車両のサイレンの音を耳にした。

家族に何時帰れるか分からないことを告げ家を後にした。

旧の塩瀬門戸の荘線を南進して行くと、小林付近一帯で屋根瓦の落下、塀の倒壊、電柱の倒れ等横目で見ながら南部出張所に到着した。

出張所に着くと既に車両2台（タンク車、ポンプ付き梯子車）が出動していた。

非番員２名が出動しており、最低人員４名はまだそろっていない。先に出動した職員が、住民の駆け込み通報を記録している。文化住宅が倒壊し、生き埋めになっているという内容だった。

この情報をもとに現場に行くことにした。その時点で５名がそろったので、その現場に向かって出動した。

先程の情報を確かめるため、付近の避難者に手当たり次第聞き込みを実施した。

生き埋めの確信がとれたのは、乗用車が路上駐車されていたことである。これで90％現場に要救助者は居ると判断した。

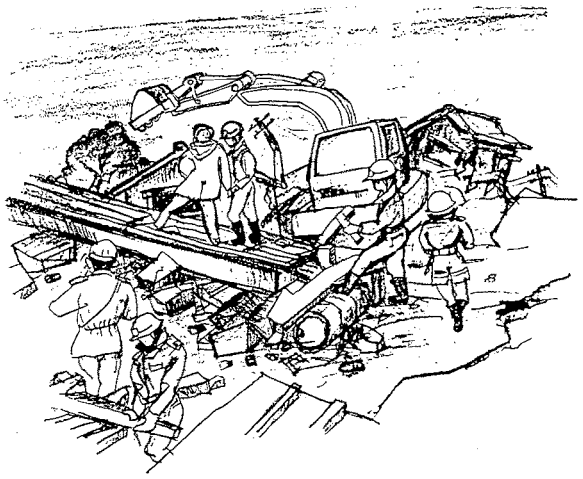
隊員４名と救出活動を開始した。倒壊建物の隙間へ大声で、時にはハンドマイクで呼び掛けるが応答はない。隊員は、瓦礫の山となった木片や瓦を撤去していくが、時間ばかり費やすだけで進展が見られない。車両には有効な資機材が積載されていない。

人力だけでは何時間かかるか予想もつかない。それに隊員の疲労も考えなければならない。これではお手上げである。周囲からは野次馬の「消防何やってんねん、早ようせんかい」の罵声が耳にとびこんでくる。悔しい思いで一杯であるが、根気よく作業を続けた。

情報ではベットに寝ているとのことであったので、このベットを捜すことに専念した。

作業を継続していると応援隊（救助工作車）が到着した。チエンソー、ノコギリ等を活用しベッドの発見に漕ぎつけたが人影は発見できなかった。丁寧に瓦礫を除去しているとベッドの上に足首を発見した。呼ぶが返事はない。隙間がないので引っぱり出すことはできない。クレーンを活用させ何とか身体に傷を付けないように救出したが、既に死亡状態であった。

悔しい思いをし悲しい結果となったが、隊員は良くやってくれたと思う。隊員達に感謝したい。重機類の配備等を切に望む。



「突然目の前が真っ白に！」

東消防署　救急第１隊　消防司令補　梶本　和夫

当日、私は東消防署の救急仮眠室で仮眠中であったがもの凄い地響きと共に、激しい上下左右の振動で飛び起き、一瞬、何が起こったのか分かりませんでした。

それが地震であるという事に気付いたのは、しばらくしてからのことでした。なぜなら、いまだかってこれほどの大地震を経験したことが無かったからである。

事務所内の惨憺たる状況を見て、とっさにガレージ内の救急車をはじめ消防車両は無事かということが頭に浮かび、駆け降りてみますと既に受付勤務員の手によってシャッターは開けられ、全車両が無事であることを確認して一安心した。

それから外の様子を見回したが、まだ薄暗さの中に見えた風景は別段いつもの「それ」と変わりはなかった。

数分後、付近住民らしき人が慌てた様子で駆け込んで来て、受付勤務員に何かを訴えているようでしたが、丁度、その時に救急出動指令が入ったため、受付の方はあまり気にもとめず、救急車に乗り込み救急現場に向かった。出動途上はまだ薄暗く現場に着くまでの間は、「大きな地震だったな」という程度の認識しかなかった。

突然、走行中の救急車の前が「真っ白」になったので停車するよう指示しよく目をこらして見ると、あたかも道路の真ん中に「家」が建っているかの如く、倒壊家屋の2階部分の外壁が救急車のヘッドライトに照らされて「真っ白」に見え道路中央へ崩れ落ちていたのである。

この光景を目のあたりにして初めて、私をはじめ他の2人の隊員もようやく「事」の重大さに気付いた。すると、その倒壊している家屋の横手から「こっちや、こっちや！」と叫ぶ声が聞こえた。

道路は倒壊家屋で通行できない状態、車をUターンさせ、迂回しながら現場に到着した。そこには、近所の人達が数人で倒壊家屋の下敷きになっている「人」を救出している真っ最中であったが、いかんせん、倒壊家屋が重くてどうしようもない状況であった。

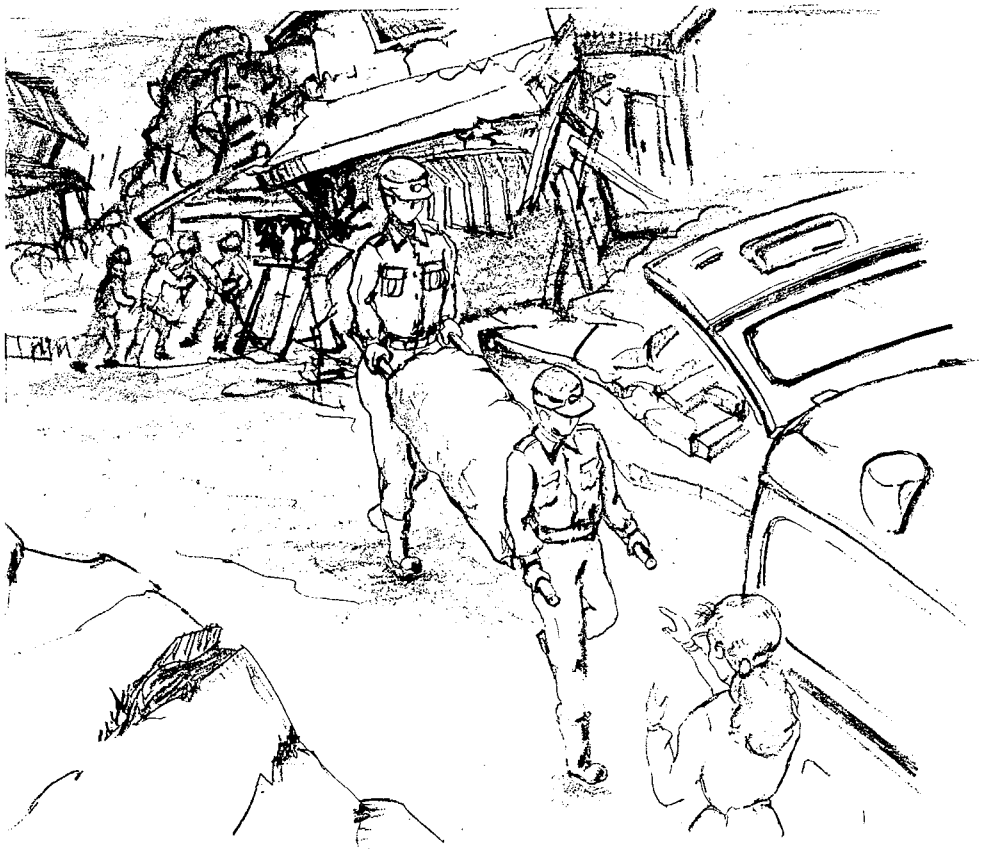
救急車に積載してある物で利用できる物を物色し、全員でどうにか救出することができた。

まだ、もう1人が下敷きになっているとのことであったがその人はどうやら出血しているらしく「血」だけを確認できたが、その姿は全く見えなかった。

私は、この状況では救出するのに何時間かかるか分からないし、それに救出した怪我人を一刻も早く病院に搬送しなければならない旨を説明し、必ず、救出部隊をこの現場に差し向ける用に無線で本部に連絡するから、残った人達でなんとか救出を続行してくれるようにと要請して病院へ向かった。

この時点では、まだ幹線道路は空いていて、支障なく病院に到着することができた。が、病院の方が大変な様子で、既に多数の怪我人がかつぎこまれており、また、処置室は医療資材が床の上に散乱し、通路はかつぎこまれた怪我人であふれ、まるで野戦病院の様相を呈していた。

それからというものは、本部の通信指令室から次から次へと救急出動指令が指令され、こちらがたった今、指令された現場に向かう途中に、既にその次の現場を指令してくる有様であった。



また、現場に着いても、その現場ではまだ下敷きになっている怪我人は救出されておらず、救急隊も救助救出部隊と一緒になって救出活動に当たったり、やっとのことで瓦礫の下から救出しても、既に死亡状態であったり、救出状況いかんによっては、その次の現場に向かうといったような事が度々であった。

この頃からは、市内の幹線道路は無論のこと、道路という道路は車で埋め尽くされ、現場到着の遅延や、病院到着の遅延が目立ち始めた。

また、本部から指令された現場に向かう途中に、突然救急車の前に住民が飛び出してきて車を止められ、家が倒れてその下に子どもや老人が下敷きになっているから何とかしてほしいと懇願されることもあった。

その現場に行くと、ペシャンコに潰れたほぼ中央辺りに下敷きになっているとのことでしたが、我々救急隊員の3人では、いかんともしがたい状況であり、その場から無線で本部に救助部隊の派遣を要請したが本部からの返答は「全ての部隊は出動中である」とのことで、仕方なく住民にそのことを告げ、とにかく市内全域がこのような状況にあることを説明して、その場にいる人達だけで救助に当たってほしいと告げ、本部から指令された現場に向かわざるを得なかった。

救急車には、怪我人を手当てする資機材は積んでいるが、このような場合に役立つ救助資機材はほとんどなく救急隊員と救助隊員を兼任しなければならない状況であるのに専門の救急では6馬力出せても、専門外の救助の方はたったの3馬力しかでない。圧倒的な瓦礫の量に3馬力の無力さを感じ、歯痒い思いをした。

この歯痒い体験の中から感じたことをまとめると

1　救急隊も生き埋め者の救出活動が優先し、また、道路渋滞や倒壊物による通行不能箇所も多く、結果的には有効な救急活動が行えなかった。

2　家屋倒壊現場では、救助するために取り除かなければならない家屋構築材の量が圧倒的に多くて長時間を要することと、救出作業時間短縮のためには有効な手段（例えば、大型の重機）が必要なこと。

3　通信回線（電話）がパンク状態であったため、各病院の受入状況についての情報が全く得られず、病院収容について混乱があった。

4　このような同時多発災害は過去において例がない。「救急」、「救助救出」、「火災の消火」、「ガス漏れによる警戒」等の各種同時多発災害の対応の難しさを痛感したこと。

5　今回の地震で、ガス漏れ事故は多数発生したが、これが原因の火災は0件であったことは特筆すべきことである。

6　自主防災組織の重要性を痛感した。

等々である。

阪神大震災に思う

西消防署　救助第2係　消防司令補　西　　和光

この度の震災に際して、消防職員個人個人はそれぞれ100%、200%の力を発揮し活動した。自らの使命感と市民の要請に駆り立てられ、体力の限界に近い活動であった。しかし、そこまで頑張った職員の心に共通した無念さが充満していると思われる。「人員がもっといれば情報が早く正確に伝われば、資機材がもっと充実していたら」など個々の力では、どうしようもない事態に直面し、唇を噛み悔し涙を流したに違いない。

将来、この宝塚市を同程度の災害が襲った時、今回より一人でも多くの命を救うため施設、装備面、組織面で強化を図り、真の防災拠点を確率する必要がある。

「施設、装備面」で特に強く感じたのは、

(1)　災害に強い庁舎。

(2)　ユンボ、クレーン等の重機の配置と調達ルートの確立。

(3)　資機材の充実。

以上の3点であろう。

「災害に強い庁舎」については、当市の庁舎は築後10数年でまだ新しく、阪神間の各消防本部の被害状況からみれば少ない方であったが、被害の多かった庁舎の例をみれば、ドアの開放ができなかった。ロッカー等が倒れた。消防車両が移動した。その他数多くの被害があり出動体制に支障をきたしている。

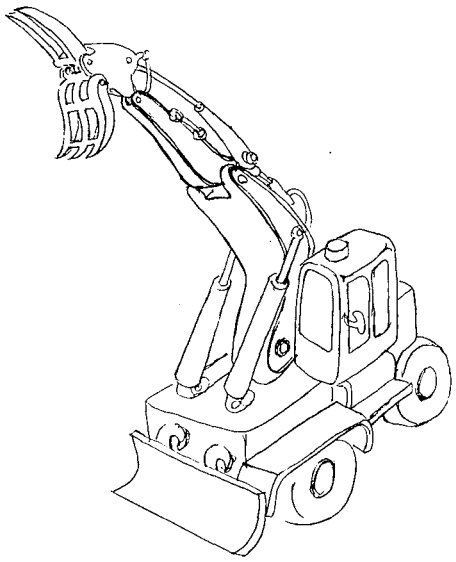
「ユンボ、クレーン等の重機」については、当市消防本部には保有しておらず、今回の震災のように多量に必要となった場合の調達がスムーズに行われるよう調達ルートの確立が急務である。救助現場に到着し、重機が無いため、諦めて後まわしとなった現場や長時間を要した現場が多くあり悔やまれてならない。

「資機材の充実」は、消防職員が使用するだけでなく、今回の災害では市民から「スコップを貸してくれ、バールはないか、ジャッキが必要だ」との声が多かった。多くの市民が、家屋の下敷きになった人を自分達で救助しようとしたが道具がなく、手をこまねいたケースが多発した。そのためにも従来の水防倉庫と同様のものを市内各所に置き、災害の時に自由に使用してもらうようにすればと思う。

その他にも組織面で特に感じたのは、「職員数の不足」である。

今回の震災で、他市では、団員の方が過労死される事態が発生し、マスコミは不眠不休の活動を大々的に報じ、ある意味で「美談」として取り上げたが、いかなる災害であっても生身の人間が仕事をする以上、不眠不休であってはならず、まして「美談」など有り得ないと思われる。大きな災害であればある程適切なローテーションで現場活動が実施できる人員の確保が必要であろう。

その他、反省点をあげればきりがないほどであるが、多くの消防職員、市民の方の声を聞いて、災害の無い街の真の防災拠点作りを一日も早く築いていきたいものである。



「悲痛の声119番」

消防本部　通信第１係　消防司令補　薮内　和雄

私は、深夜の勤務を終えて待機室で仮眠中であった。突然、「ドスン・ガタガター」異様な音と共にベットが上下に、続いて左右に揺れた。体がベットから落とされそうになる。ベットにしがみ着き揺れが治まるのをまった。揺れが治まってから当務員全員が事務所に向かって飛び出した。勤務者を初め、全員の安全を確認する。

庁舎内は、停電状態のため朝の光が頼りである。幸いにも指令台・無線統制台・防災情報総合表示盤は固定され耐震設備が施されていたので倒壊、移動等は無く無事であった。

指令台の“119”番着信専用回線は、全回線が点灯し呼び出し音が指令室を占拠してしまった。

通報を受信したが、着信音及び他の通信員の受け答え等で通報内容が聞き取りにくい。このためそれぞれが甲高い声となる。受信内容は、「家屋倒壊により生き埋めになっている」、「ガスが漏れているのかガス臭い」、「怪我人がいる、救急車を頼む」、等が主であった。

６時から７時頃にかけて非番員が出勤してきた。そして119番受信回数も徐々に減少してきた。通信室

内もこれにつれて落ち着き始めた。

この頃の119番の受信内容は、「ガス臭い、何度も通報しているのに…。」、「生き埋めがいるのに何故、助けに来ない。」等の苦情が多くあった。我々も「分かりました。直ぐに出動させます。」と言ってあげたい気持ちで一杯であった。しかし、既に全車が出動中であり、救出活動も時間を要している状態であったため、ガス漏れについては、大阪ガスへの通報は無論のことであるが、元栓の閉栓を指示した。負傷者の発生については、病院紹介と自家用車等での搬送を願った。生き埋め者の発生については、できるだけ早く行く旨と近隣者による救出活動を願った。残念に思う気持ちはあれど、現有の消防力を遥かに越える大惨事であることを考えれば、市民の力を頼る対応とならざるを得なかった。

当日の119番受信回数は1,400件を記録。通常時の20～30倍を計上した。

通信員は、災害現場を自分達の目で見ることはなかったが、受話器の声から宝塚市内の被害の大きさを想像することができた。

この地震災害活動等の経験を踏まえて、以下のとおり改善策が取られた。

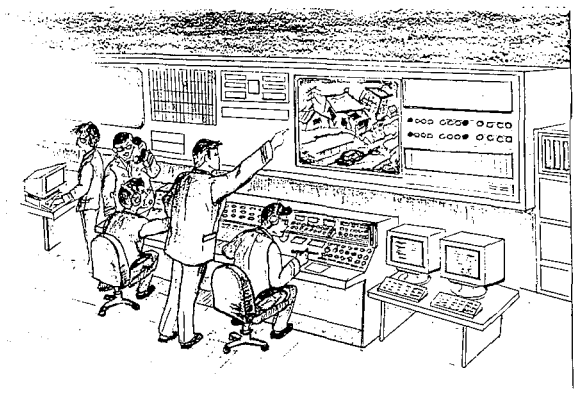
先ず消防本部では、通信関係施設の耐震性強化策として、各種通信機器の非常電源等の強化が行われた。

また無線装置については、平成8年度で消防無線全国波が2波増設されることとなり、現行の1波と合わせて3波体制が整備されることになっている。

更に市の事業としては、地域防災無線が設備されると共に、災害情報ネットワークシステムが整備される。

この端末器は、勿論消防本部通信指令室に設置されることとなっている。

一方県では、通信衛星ネットワークシステムに合せて新に、災害対応総合情報ネットワークシステムも設置されることとなり、消防本部通信指令室でも運用を開始することとなっている。



「涙をこらえて防災活動」

宝塚市消防団　消防団副団長　古東　宏之

以前に放火事件が続いてから、母に言われて2階の道路側で寝ている。何か気配を感じ窓を開くと、遠距離まで見渡せ、音にも敏感に反応することができるから。

私は、あの日5時半にトイレに立ち、もう少し寝られると布団の中でうつらうつらしていた。

突然強い揺れが襲ってきた。2・3度突き上げられ、東西の横揺れがしばらく続いた。ゴォーと言う怪獣の雄叫びの様な音に続いて、ガタガタと言う凄まじい音で始まった。木の捻じれる様な音、ガラスや金属が擦れる音等が混じっていた様にも思う。

2階での衝撃は、フライパンの上で弄ばれている様な強いもので、片膝ついて耐えた。

本震は20秒程度（心理的に感じた時間は遥かに長いものだった。）だったと言うが、この間、火事、飛行機の墜落等さまざまなことを思い浮かべた。やっと我に帰り窓を開け辺りを見渡したが大した被害はない様に判断した。下はどないなものかと家族に声を掛けると「真っ暗やけど大丈夫、恐かった。」と返事があり、直ぐ階段を降りた。やっぱり関西は震災のない良い所だとこの時は思った。

多くの団員と、市民会館近くまで来た時、これは

ただ事ではないと、背筋に冷たいものが走ると共に昂ぶる心を押さえることができなかった。山に赤肌が目立ち、道路の下を巨大なもぐらが走った様な亀裂、箕で籾殻をひさびた様に屋根瓦が一塊になった異様な光景を目の当たりにした。坂を下りて行く程、倒壊家屋等被害が大きくなって行った。

家がぺちゃんこになっているではないか。地下に潜ろうとしている家、高所から飛降りそうな家、いつも建物の陰で見えない背景がくっきりと見える。これは生き地獄ではないか。無線で、「負傷者はキトク状態」と言っている。人の生命はどうだろうかと増々心配になってきた。

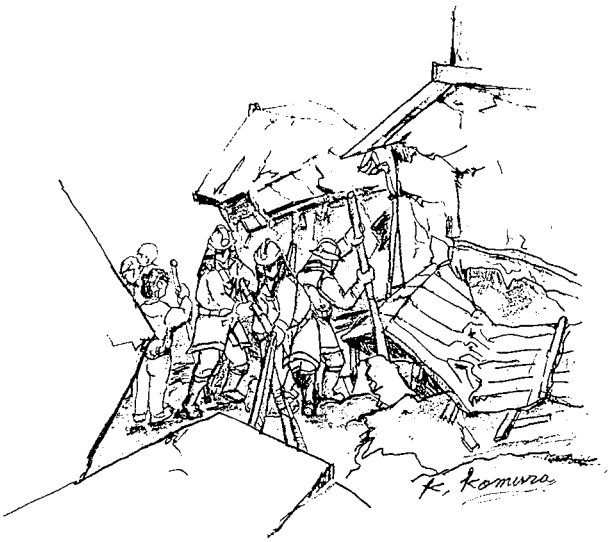
二分団単位で救助にまわった。町全体が、崩壊等で塵ぼくなっているうえ、鼻をつくガスの異臭の中を歩いた。数え切れない緊急車が行き交う中、夢遊病者の様になった被災者の人達が、りりしい団服の男達を見て安心された様に感じた。

酷い、柱も梁も用をなさず、コンパクトにたたみ込まれている。食器等軽い物が外へ放り出されている。足の踏み場もない。家具も寝具も見分けがつかない程、何もかもめちゃくちゃ。直ぐに重機も応援に来ていた。何十人の大人の力をもっても排除することができない。一つひとつめくる様にして取り除いていった。「見えた、おったぞ！」と言う声と共に、作業は一層慎重に迅速になった。じれったい気持ちを押さえる様に大声で、「前、後ろ、右、左。」とかけ合う様になっていた。佛さんの布団の様な高級羽毛布団に包まれた、白髪の女性だった。壁土も一緒だった。「あかん。」と誰かが一言。「後は消防団がやります。」と言うと、優しく救出してくれた20名近い人達も、道路に彼女を置いたまま次の人命検索へと向かった。

波豆分団の消防車両を回す様指示し、沢山の警察官のおられる場所へ走った。「こんな緊急時なんやから検死の必要ないねんけど。」と言いながら、中堅の人が来てくれた。無線で指示を仰いだところ、「スポーツセンターへ搬送」との指示を受けた。その頃には家族も側に来ていた。布団に残っている赤土を払いながら腰が抜けた様にして泣いていた。「この様な状態なので、消防自動車でスポーツセンターまで搬送します。」と家族に告げ了解を取った。「福井君、急ぐことはないで。安全運転で走行して。」と指示した。この女性が車からずり落ちない様に、自分の全身で必死に支えながらスポーツセンターに向かった。スポーツセンターには沢山の人が寝かされたいた。悲しみのあまり鳥肌が立った。いつまでも感傷にひたっておれない。手を合わせその場から去り西消防署へ活動状況報告のため戻った。報告後、直ちに妙玄寺への救出出動命令を受け現場に急行した。

3月5日、皇太子夫妻ご出席の合同慰霊祭に出席してあの女性の名前が読み上げられた時、自分の親を亡くした様な辛い思いで、涙が知らずに頬をつたい、数珠を強く握りしめた。

「私達の住んでいる所は震災は絶対にない」と思い込んでいたことが、初動の遅れにつながった。家の中、家の周囲の安全対策、屋内外では地震の時どうするか、非常持出品の準備等総点検をする必要がある。「喉もと過ぎれば熱さを忘れる」とならぬ様にこの20秒の貴重な経験を活かさねばならない。



「遺体の温りに無念の思い」

宝塚市消防団　波豆分団長　福本　真一

それはあまりにも突然襲って来た。連休明けということを除けば、いつもと変わらない平穏な一日が始まるはずだったのに……。

幸いにも家族に被害は無く、家の周辺も特に変わった様子も無くまずはひと安心。

携帯ラジオのスイッチを入れる。淡路島を震源とする非常に強い地震が発生し、淡路、神戸、阪神地区に被害が出ていることを伝えている。その情報は非常に断片的で事態の全容を我々に伝えてくれるものではなかったが、未曾有の何かとんでも無いことが起こっていることだけは理解できた。しかし、それ以上は私自身の乏しい経験と知識では、いったい何が起こっているのか想像できるものではなかった。

午前7時30分頃、電気が復旧した。空からの映像で火事が多発している神戸の街の様子が、テレビの画面に映し出されていく。

午前8時、消防団長から出動命令。「宝塚市内が非常に混乱している。消防長から出動要請があった。」とのことであった。急ぎ、団員に連絡を取るが、電話がなかなか繋がらず、分団器具庫に集まったのは私を含めて5名であった。西谷分遣所に全分団が集結し、宝塚市内に向けて出発した。総勢60名ぐらいであった。

午前9時頃、西消防署に到着。2分団から3分団の合同チームを編成し災害現場へ出動することとなった。

波豆分団は長谷分団と売布方面で倒壊家屋の下敷きになった方の救出に向かう。現場が近づくにつれ、倒れた電柱、盛り上がった道路、脱線した電車や曲がりくねったレールを目の当たりにして我々は、想像を越えた地震のエネルギーの物凄さを思い知らされた。ガス漏れもひどかった。いたる所で刺激臭が鼻を突く。

現場に到着したが、既に目的の家屋では下敷きになった方は救出され病院に搬送されたということであった。しかし、近くにまだ家屋の下敷きになっている老人がいるということで、その現場に向かう。消防救助隊の隊員2名が、既に救助に当たっていた。

1階部分が完全に潰れ、2階の窓から容易に家の中へ出入りできるような状態であった。1階で寝ていたお婆さんが、梁の下敷きになっていた。救助隊員と協力して作業を進めるが、非常に困難な作業であった。そのうえ、悔しいことには我々の火災を想定した積載備品では、このような場合に有効に活用できる物が非常に少なかった。

少しずつ柱や板を取り除き、やっとお婆さんを梁の下から引き出したが、既に息絶えていた。遺体を自動車に乗せる時、私の手にはその体の温もりが感じられた。家族の悲しみを思うと殊更に無念さが込み上げてきた。全員合掌で見送った。

次いで、川面の倒壊家屋現場で救助活動中の中部分団の応援に向かう。ここでは、重機が1台救助活動に当たっていた。玩具箱をひっくり返したように材木が散乱して、どんな揺れ方をしたらこんなになるのかと思うほどであった。材木の下から女の人の声がする。「頑張れ、今直ぐ助けるから」と一番近くで救助作業を行っている消防職員から声がかけられる。重機で太い梁を材木が崩れないように慎重に吊り上げながら材木を取り除く。

約15～20名位で作業を行っているがなかなか捗らない。

しかし、懸命の作業の甲斐あって助けることに成功。我々の心も救われる心地であった。重機があればこその救助活動であった。

雲雀丘の阪急電車操車場横のマンションで火災発生。急行するが、到着時には鎮火。川面に戻る。交通渋滞が酷い。

東西の道筋の古い木造家屋が軒並に被害を受けている。ガス漏れも酷い、ガス漏れが陽炎のように見える。消防自動車は、遺体搬送のためスポーツセンターへ廻ったため、残った団員は徒歩にて移動することにした。

しかし、我々の消防団員の制服を見掛けると、「ガス

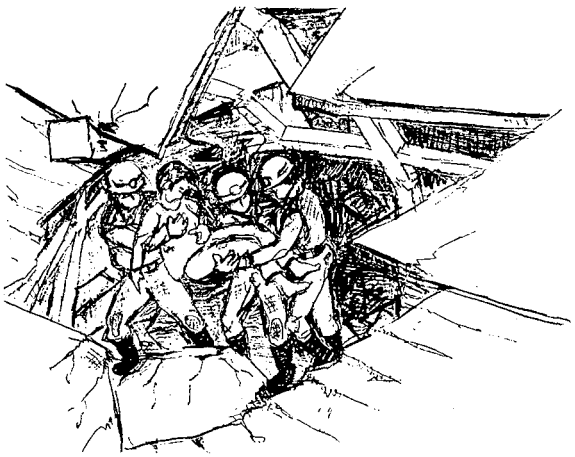
漏れしている。なんとかしてほしい。」、「ブロック塀が倒れそうだ。人が近づかないようにロープを張って。」など10mと歩かないうちに声を掛けられる。何とかしてあげたいという気持ちはあっても、我々にできることは本当に限られている。十分なことをできないもどかしさを感じた。例えば、ガス漏れの場合、各戸の元栓は我々でも閉められるが、本管からのガス漏れは手のつけようがない。“ガス漏れ注意”と貼り紙するのが精一杯。

対策本部に指示を仰ぐため無線で連絡を取ろうとするが、なかなか繋がらない。この後、阪急清荒神駅の山手で発生した火災現場で本隊と合流し、消火活動を行った。西消防署に戻ったのは、午前3時頃だったろうか。この日の災害救援活動は、以上で終了した。

災害救援活動の手記の最後に、この日の感じたことを記しておきます。

(1) 震災の後、消防団の活躍が認められ、消防団の価値が最認識されたと聞きます。

しかし、私自身を振り返ってみますと震災当日を含め消防団員として本当に十分な活動ができただろうか、自問自答しています。突然のこととは言え、不測の事態に対する備えは必ずしも十分であったとは言えません。今後は、万が一、いざというときのために充分な備えを心がけたいと思います。



(2) 震災当日、消防団は2～3分団の単位で被災現場を転戦したわけですが、今回のような同時多発的な災害では、行政、消防、警察さらに自衛隊が加わっても、交通事情の問題も含めて対応しきれないことが非常に多くあると言うことです。

宝塚市の南部地域には消防団がありませんが、このような災害の場合には、消防団のような地域に密着した自衛の組織が非常に重要であると感じました。

「必死の思いでエール」

西消防署　予防係　消防司令補　石橋　豊

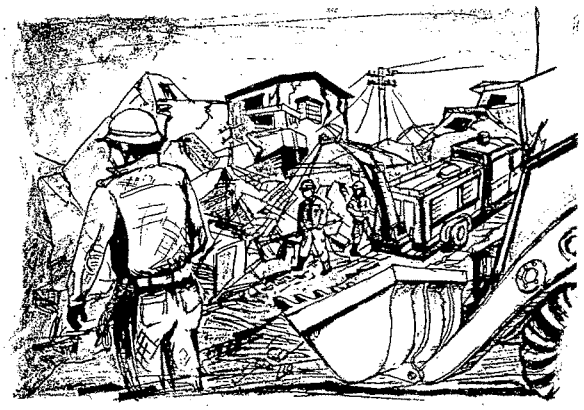
「ドン・ガタ・ガタ・キャー・恐い、お父さぁん」

そう、これは紛れもなく今年1月17日早朝我が町、阪神・淡路地域に未曾有の大災害をもたらした地震の我が家の状況であり、私にとって長い1日の目覚めであった。

第1撃で揺り起こされ、妻と子をかばおうとするが、あまりの揺れで立ち上がることすら出来ず、おさまるのを待ち長男を連れ1階へ、続いて妻と二男も駆け降りる。1月17日といえば大寒を間近に迎え、1年で日の短い最も寒い時期、直後は完全な闇の中、時間すら分からず恐怖感が募る。続いて起こる余震におびえる子供達をこたつの下に潜らせ、脱出口を確保するため玄関戸を開けて周囲の状況を伺ってみると瓦はおびただしく落下、植木は割れ、単車・自転車は倒れそのすごさを目の当たりにして、ただごとではないと感じた。

一人またひとりと近所の人が声を震わせながら互いの安否を気づかう。私は、とにかく「ガスをとめろ」と、その人たちに告げ、数軒、家の戸を叩き状況を確認して回った。そして我が家の散乱しているガラス破片等の危険排除を行い自転車にて出勤する。

途上において、私の目に飛び込んでくるものは、道路の亀裂、壁体の割れ崩れ、電柱の倒壊等信じられないような惨状である。交通量はほとんどなく、静けさが不気味に感じる。



庁舎に飛び込むと2階のフロアーには誰もいない。当務員はすべて市内あちこちで発生した現場に向ったのだろう。庁内の状況は、かなりのダメージを受けている。机は四方にずれ、卓上の書類は何もかも散乱し、更衣室内のロッカーは無残にも横たわり内部が飛び出した他人の物と判別が出来ない。すぐさま着替えて指令室に駆け込むと、署長からの下命は「とにかく1小隊を確保しろ。編成でき次第災対室へ報告せよ。」であった。

通信指令室は、パニック状態である。活動中の各隊との交信に加え、途絶えることのない119番通報の対応に苦慮しきっている。

この時点で私ははっきりと、この地震による影響は自治体消防隊の域を越え国家全体の組織力を要する大災害に至っていると思った。

2階へ戻ると一人またひとりと参集して来ている。

「とにかく小隊を編成しろ」と人員確保を行う。そして7名の小隊が編成された。我々小隊への出動指令は、川面5丁目で7名の生き埋め救出であった。

第一線の車両は1台もなく、人員搬送車に手当り次第の資材を積み込んだ臨時編成隊の小隊長としての出場である。出場前からかなりの苦戦は予測していた。出場途上では交通量がふえており、場所によっては全く動かない状況である。情報では、阪神高速道の橋脚落下等あちらこちらで道路の寸断があり、緊急自動車であっても思うように走行出来ないとの事である。細心の注意を払いながらの走行中、聞こえてくる無線交信は、現場活動隊同士の連絡が混信する中、いかんともしがたい消防力の劣勢による後続隊や特殊車両の要請等いずれも悲壮な内容ばかり、この時の私には、いったいどれ位のひとが瓦礫や家財の下敷きになっているのか想像等つくはずもなかった。私が向っている現場でも状況がどんなに不利であっても応援隊の期待はまず出来ないことを肝に銘じながら到着した。

すぐさま、聞き込みを実施すると、7名のうち5名は先着した警官と住民により救出されており、残り2名は倒壊した家屋の下でかすかな声をあげて助けを求めているが、人力ではとうてい救出不能とのことであった。

私は隊を2班に分け、それぞれの救出にあたらせた。自身では崩れる虞の極めて高い家屋2階開口部より内部への進入を計り、生き埋め者の生存の確認を幾度となく繰り返して行う。救助隊の到着を知らせ元気づけるためのエールを送り続けた。各隊員は、必死の救出作業を続けたがいかんせん木造建築物であっても棟木や垂木そして何百枚の瓦が乗っている。そう易々と除去出来ない。5分10分と時間が経過するが有効な手立てが見当らない。藁をも摑む思いで救助工作車の要請を行うが、指令室からの回答は「救助事案は市内全域で発生している。工作車は他の現場において救出活動中、現有の人員機材で対応せよ」との内容ばかりである。

今自分の目の前で瓦礫の下に埋もれ、かすかな声で救出を求める人を見殺しにできない。隊員には自分達の力で救出する旨だけ告げ、勇気を奮い立たせた。

15分、20分と続けた。この間にでも、もし火が出れば生き埋め者2名の命はないだろう。私の心の中では消防力に対する奢りや、震災に対しての無防備等安心の上に胡座をかいていた認識の甘さ、何よりもまして人間の無力さをひしひしと痛感していた。

しかしながら、次の瞬間自分の目の前に光が差したように思われた。ある作業員風の男性より「今、

ユンボがこっちに向かっている。運転者は、腕の良い男だから救出を手伝わせてくれ」との内容だった。私は力がみなぎる思いであった。「これでなんとかなる」と、2名の内、まず、道路から奥まった方より救出を始めた。柱の1本、板の1枚を慎重に除いて行く。何しろ何トンと言う重さが生き埋め者を襲う虞があるのだ。一旦除く度に声をかけ生存を確かめる。時間はかかるが確実に近付ける。ようやく1名の体の位置を発見し、手掘りにて体全体を確保した。45歳位の女性で、疲れた様子はあるが意識は正常元気である。この時点で市内の救急病院は収容不能であったため、隊員2名に市総合体育館の仮設救護所への搬送を指示した。

続いてもう1名の救出を始めた頃、消防団の1隊が応援に来た。出火に備えてポンプ車の放水体制を確保するとともに、ユンボと人力による救出作戦にあたり約30分でもう1名を救出した。再び仮設救護所へ搬送した後帰署についた。

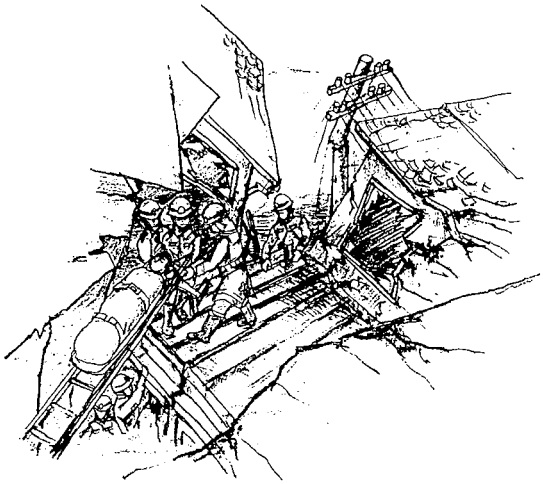
再度の指令は、谷口町における救助者の搬送のためで男性1名、女性1名が先着隊によって救出されていた。しかしながら、残念なことに2名とも既に死亡しており市武道館に設定されていた仮設安置所へ遺体を搬送した。ほんの1時間前には2名の救出に成功した。しかし今度は犠牲者となった遺体の搬送である。心が痛い、隊員に遺体を大切に扱うよう告げ出発する。

仮設安置所には、救急車、消防車が次々と到着し遺体を収容する。どうしても公用車が間に合わない人はマイカーにて遺体となった家族を運ぶ。

昨日の晩まで会話をしていた家族、もう話す事もない家族を一人またひとりと搬ぶ人。涙が止まらない「どうしてこんな事が」と心の中で叫ぶ。人々のその様子を見て隊員の言葉がなくなる。「とにかく本部に帰ろう」。

帰署後、活動を終えフロアーに参集する隊員の顔を見る。どの顔も疲れが伺える、連続の活動で疲れ切っているのだろう。がまた新たな指令により出場して行く。

私には現場活動とともに、調査の任務がある。各隊の活動状況をまとめる。その数字が増える度にやり切れない思いとなる。今度の震災による死者が5,500名を越えた。世界でも例のない大惨事となってしまった。都市直下型の地震の恐さは、以前より叫ばれていたことであるが、これ程までの被害を受けたことによる地震に対する怒り、自然に対する怒りを覚える。



だが、私はマスコミで放映される被災者の復興への意欲、力、そしてそれを支えるボランティアの人々、多くの全国の支援者等のやさしさを目のあたりにし、不幸にもこの地震をともに経験した人々と、平成7年1月17日5時46分の状況はいかにあったか、自分達は地震に対してどう立ち向かったか、人々はどのように頑張ったかを語り尽くせるよう、前を向いて一歩づつ進み、この時代を生きたことに誇りを持ち続けたい。

「命の叫び!!」

西消防署　救助第2隊　消防司令補　市場　通行

川西市花屋敷にある共同住宅2階の自宅で就寝中「グラ、グラ」ときたので跳ね起きた。「なに、これ!」と叫ぶ妻に「地震や!」と答えた後は、木製の柱を両手で掴んで立ち上がったがとても動ける状態の揺れではなかった。揺れが収まるまでそのままの状態

で妻は、私の両足にしがみついていた。寝室の箪笥と本棚は地震に備えて紐で縛ってあったので倒れなかったが、その上に置いていた本15冊程度が枕の上に落下した。

揺れが収まった後に屋外に出ると、道路のマンホールが15cmほど盛り上がりブロック塀が倒れガス臭が漂っていた。共同住宅8軒のガスの元栓を閉め近所にマッチや蠟燭を使わないように伝えた後、自宅から半径50m周囲の住宅を見て回ったが倒壊したものはなかった。激しい地震だったが大きな被害ではなかったなあと思いつつ帰宅し、ラジオのスイッチを入れたところ、淡路島と神戸で震度6と聞いて驚いた。

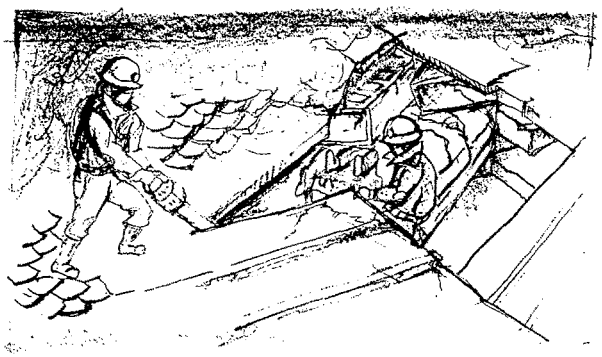
妻に食料や下着等を入れた非常持出袋2個を渡して、近所の人と一緒に避難所へ行くように指示し、マイカーで出勤した。途中で川西市消防本部の消防車が家屋倒壊による生き埋め者の救出活動中であることを広報していたのを聞いたので、アクセルを吹かせたが、信号が消えており、道路の所々に亀裂があったので、西署まで20分程度かかってしまい、7時ジャストに到着した。

既に、先発のタンク車と救助工作車は車庫になかった。当直係長に出勤報告した後、屋上から市内を観察したが火災の発生している様子もなかった。持参していたカメラで四方を撮影した後、この4月に栄町出張所に配置される予定の新車のタンク車を始動して出動準備をした。直後に、出動指令がかかった。市内仁川月見ガ丘の共同住宅倒壊による生き埋め現場であった。出動隊員は、5名である。私が機関員として出動したが、仁川台へ至ったとき、道路は陥没し、マンホールは浮き上がり非常に走行し難い状態であった。ようやく8時01分に現場到着した。

現場到着時に共同住宅が倒壊していたのは理解できたが、どのような形で倒壊しているのか判断できなかった。聞き込みにより1階が北側から南側にかけて斜めに倒れており、その上に2階部分が乗っている状態であることが分かった。また、生き埋め者は1階の北端に5名の母子、そこから2軒目に老婆が1名いることも分かった。付近の住民により既に救出が進められていた。1階北端の部屋に入って2階部分から呼び掛けたら小さな子供の声が微かに聞こえた。生きていると分かったので2階の収容物を住民と共に屋外へ排出して畳をめくり床板を剝ぐことにしたが、新車の配置予定車には、バール、鳶口、車両用ジャッキ、発電機、投光器ぐらいしか道具がなかった。鋸とチェーンソーが欲しかった。

救助隊員になって24年間、常に救助工作車と救助隊員とともに出動して救助活動をしてきた私にとっては、手と足をもぎ取られた心境であった。さらに、オレンジの救助隊服を着ているのは私だけなので名札の救助隊長という文字を確認して、住民が期待の声を掛けてくる。非常に辛い心境であった。

しかし、幸いにも、住民が協力的で鋸とチェーンソーが調達できた。チェーンソーを持ってきてくれた人は、自身で床板を切断して救助活動を行った。声のする真上の床から切断をするので、要救助者の体を切らないかと心配したが、すぐに建設関係者だと判断できたので見守った。その人が双子の一人、4歳の男子を最初に引き出した。顔は、埃まみれであったが怪我もなく意識もあった。しばらくして、2メートルほど離れた所からもう一人の男子を救出した。この時点で無線により救急車を要請したが、通じないので付近の住宅の加入電話で要請した。



その後、まだ瓦礫の下から声がするので除去していくと、左手がでてきた。肘まで掘り出したとき、「頑張れよ、すぐに出してやるからな」と声を掛けて手を握ったら「早よ助けてくれ」と叫んで思いっきり手を叩かれたさらに掘り起こしていくと左肩まで出たので、よく観察したら鴨居が丁度顔の上に乗った状態で、あと1センチメートルでも落下していれば死んでいただろうと思えた。危機一髪の状況であることから、車両用のジャッキを噛ませて慎重に作業を進めたので20分、30分と時間が経過していった。助けを求める声も徐々になくなって、弱っているのが分かった。現場到着から約3時間経過した11時過ぎにやっと11歳の兄を救出した。弱っていたが、この子も怪我はほとんどなかった。

後日、新聞記者から聞いたところ、この兄が双子の兄弟に声を出して助けを求めるように言い聞かせて、励ましていたそうだ。

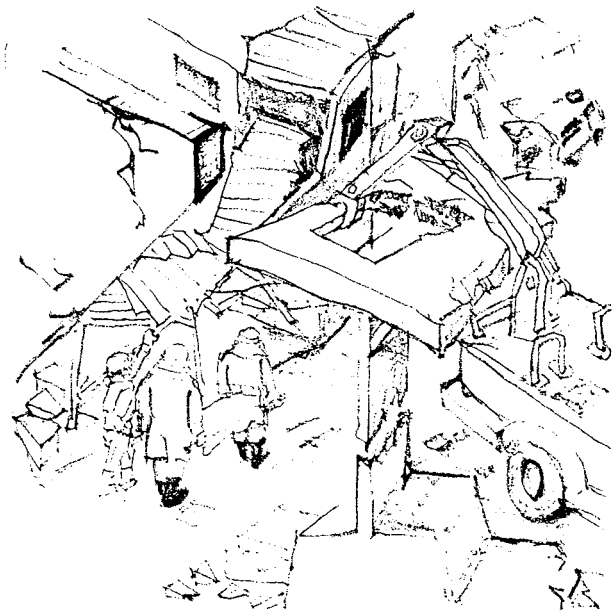
その後、同じ部屋から母親と6歳の妹を救出したが既に絶命しており、体は硬直していた。5人とも同じ6畳の和室で寝ていたようだが、少しの位置の違いで生死を分けたのである。生と死の境目を見た。

帰署後は、救助工作車と救助隊員2名を得て、14時41分にサンビオラ5番館のエレベーター内に閉じ込められている事故の救出に出動した。屋上の機械室で手動でカゴを7階に移動させて男性1名を救出した。

次に、午前中から救出活動の続いている川面1丁目の現場へ向かった。藁葺き屋根の旧家が倒壊していた。市職員と消防隊等約30人が救出活動中であった藁屋根を破ってユンボでガレキを除去していたが、この現場では、要救助者の存在とその位置が曖昧であったため難行していた。関係者に対する聞き込みを再度行い慎重に掘り起こしていたとき、ユンボの爪が瓦礫をすくって上げかけた瞬間に私の目の前に髪の毛らしいものが現れた。緊急停止させ、少し掘ると布団に入ったままの女性が死亡していた。

直径50センチメートルの鴨居と家具等に押し潰されたような状態であった。そこからは、鋸を使った手作業である。ようやく17時50分に救出した。合掌して現場引き揚げし、18時00分に帰署した。

帰署後、テレビニュースを観ていたら、午前中に救出した子供達3人が大阪からかけつけた父親に手を取られて、避難所の体育館でインタビューを受けていた。つくづく救助隊員をしていて良かったと充実感が沸いてきた。数か月後に、この子供達が母親の故郷である五島列島で、祖父母とともに元気に生活していることを知り、「頑張れよ!!」と心の中ではげました。



第 3 部

地震についての提言

地域防災計画の課題

ー阪神大震災の教訓を踏まえて考えるー

神戸大学　工学部教授

工学博士　　室　崎　益　輝

はじめに

阪神淡路大震災は、多くの教訓を私達に与えてくれた。その教訓の一つに、転ばぬ先の杖というか、備えあれば憂いなしというか、災害に対する事前の準備を決して疎かにしてはならない、ということがある。いままでの地震に対する物心両面の備えの不十分さが、被害を増幅したと考えられるからである。

ところで、自治体におけるこの備えの基本となるのが、〈地域防災計画〉だと言われている。そこで、ここでは阪神大震災の３つの反省の上に、地域防災計画と防災の備えのあり方を考えてみることにしたい。

災害危険を正しく把握する

今回の地震による第１の教訓は、正しい危険認識が必要だ、ということである。

地域防災計画では、その危険認識の一助として、災害像を被害想定などにより明確化することを要求している。自治省消防庁が「地域防災計画の見直しについて」(1987年)などの通達によって、防災アセスメント等を実施して地域の災害危険性を科学的あるいは総合的に把握するよう、繰り返し指導しているのもこのためである。

にもかかわらず、多くの自治体が大規模地震を前提とした被害想定については消極的であった、という現実がある。全国の地震観測強化地域（地震に関する何らかの異常が発見され、観測を強化すべき地域）及び特定観測地域（近い将来地震の起こる可能性が高いと考えられる地域で、阪神間も含まれる。）に存在する人口10万人以上の約130都市に対して、私が1992年に実施した調査によると、地域防災計画で地震を対象とした計画を策定していない都市が２割、また策定していても被害想定を実施していない都市が３割もあった。まともに被害想定をしていた都市が半数に過ぎなかったということである。さらに被害想定をしていた都市について、その内容を詳しく見ると、直下型の地震を想定しているところが15%、震度６以上の地震を想定しているところが34%、という結果が得られている。つまり、神戸市や宝塚市に限らず、多くの都市が今回の地震のような都市の直下で激しく動く地震を、計画の前提としていなかったということである。

さてここで問題にすべきは、いかに正しく被害想定を行うか、いかに正しく危険を認識するか、ということである。このためには、災害のリスクをその頻度と強度の両面において捉える必要がある。例えば、震度７という地震は滅多に起こらないが起こると大変なことになる、震度５という地震はさほど大きな被害をもたらさないがしばしば起きる可能性がある、といったように理解するのである。このようにリスクを理解した上で、その頻度や強度に応じて災害への備え方を検討するのである。滅多に起こらないものについてはソフトを中心に、しばしば起こるものについてはハードを中心に、といった具合にである。ここで確認しておきたいことは、滅多に起きないからといって、防災対策の対象から除外してはならない、ということである。

日本ではややもすると、「もんじゅ」の事故に見られるように、極めて発生確率の少ない事象を「ありえないこと」として黙殺する傾向にある。1000年に１回の大規模な地震についても、同じように想定か

ら排除する傾向があったことは否めない。この想定から排除したということが、結果的に裏を掻かれることにつながったのである。アメリカなどでは、核戦争が勃発した場合や大統領が暗殺された場合など、起こり得るあらゆる可能性を想定して、対策を考えている。裏を掻かれないようにするにはどうすればよいかが、防災的な発想の規範になっているのである。肝に命ずべき反省点である。

神戸市の地域防災計画で、震度5強の地震を前提としていたことが問題となったが、これも起こり得るすべての地震を拾いあげる視点が欠落していたが故のことである。当時は、歴史地震のうち当該地域に最大の震度を与えたものをもって想定地震とするという慣行があった。この慣行に従って、姫路近傍で起きた山崎地震や枚方近傍で起きた伏見地震等を想定地震として設定したのであるが、その結果が震度5の強というものであった。なお、同様の考え方によって兵庫県の地域防災計画において、宝塚市にも震度5の強が想定されていた。ここで問うべきは過去の記録にとらわれて将来をみない経験工学の限界であり、活断層などの現実を冷静にみようとしなかった非科学的な態度であったと、私自身大いに反省しているところである。

実行性のある計画をつくる

震災の第2の教訓は、計画は実行性のあるものでなければならない、ということである。今回の地震において、地域防災計画があまり役立たず「絵に書いた餅」であった、ということがある。反省すべきその理由として、以下の3点を指摘しておきたい。

その1つは、計画内容に具体性がないことであった。計画の中には、努力目標や主観的願望は書かれているが、それを何時までにどのようにして遂行するかが明確にされていないものが少なくなかったということである。つまり「できもしないこと」「やろうとしないこと」までも書き込まれていたということである。「職員は全員参集する、備蓄は3日分確保する、火災は消火する・・・」と書かれていても、方法が具体的に示されない限り、それが達成される保障はないということである。「○○さんは、自転車で、○○に参集するように」と、リアリティのある形で「どのようにするか」を具体的に示す必要がある。

もう1つは、防災計画の内容が職員や関係者に徹底されていなかったことである。地震以前に、地域防災計画を読んでいた職員は非常に少なかったと聞く。ほとんどの職員は、地震の後になって初めて、その内容を理解したのではないかと思う。ここでの教訓は、事前の教育や訓練によって、その内容の徹底と習熟を図らなければならない、ということである。これに関連していうと、地域防災計画そのものが煩雑で判りにくい構成と内容になっていることも反省しなければならない。地域防災計画に索引をつくるなど工夫すべきところが少なくないといえる。

残りの1つは、計画を見直してより良いものとする努力を怠っていたことである。科学技術の進化に応じて、また都市構造の変化に応じて、さらには防災実践の進展に応じて計画内容は見直され更新されるべきものである。そのために、防災会議を毎年1回は開催する建前となっている。ところが、一部の自治体を除いて一度作った計画をほぼ無修正のままに継承するのが常道化していた。北海道南西沖地震やノースリッジ地震の教訓をしっかり学んで防災計画を見直しておけば、今回の地震で防ぎ得たと考えられる被害や混乱は少なくない。こうした教訓とすべき地震に対して、ほとんどの自治体が調査団すら派遣していないのが、現実であった。今後は、内外の災害事例を学ぶとともに、訓練などにより実行性をチェックして、絶えず計画を修正していく構えが必要であろう。

自主防災体制を強化する

震災の第3の教訓は、大災害時には行政をあてにしてはならない、ということである。神戸市などでは、多数の火災が発生したが、その火災すべてを消火する力が行政にあったかというと、地震時の同時

多発火災を考えて消防力の整備をしていないので、とてもすべてを消火するだけの体制にあったかということである。同じように、生き埋めになった人が2万人以上発生したが、それを即座に救出するに足る体制が警察や消防などにあったかというと、これも答えはノーである。その結果、市民消火や市民救助が大きな役割を果たすことになったのである。ボランティア元年といわれるほどに、今回の地震では防災ボランティアが活躍したが、行政が無力であったが故にその出番がまわってきた、とみることができる。

いずれにしろ今回の地震は、個々の力だけではどうにもならず、また行政の力だけでもどうにもならないことを教えてくれた。地域の人々が相互に協力しあうこと、また行政と市民が力を合わせることなくして、大災害に立ち向かえないことを教えてくれたのである。淡路島の北淡町では、直ちに多くの人々が救出され、被害の割には死亡者が少なかった。長田区の真野地区では、地域ぐるみの消火活動が功を奏して、密集地であったにもかかわらず大火を免れた。いずれも、地域のコミュニティを基礎とした自主防災活動が、有効に機能した例である。宝塚市でも、地域ぐるみの救出活動の素晴らしい事例をいくつも見ることができる。

こうした教訓に学ぶならば、自主防災体制の強化を計画的に図ることが求められるのは、単に行政の力に限界があるから、ということだけではない。「自分の地域は自分で守る」という言葉があるように、防災の原点が自治にあり自衛にあるからである。自主防災体制には、消防などの公的機関が来るまでに即座に対応できるという〈即応性〉、何処に誰がいるかなどの地域の事情をよく判ったうえで的確に対応できるという〈即地性〉、隣近所で力を合わせ助け合うという〈連帯性〉、相互に注意しあって安全管理に努めるという〈自律性〉といった、公的防災体制にはない利点をもっている。この利点を生かす意味でも、市民の自覚とコミュニティを基礎に、地域の自主防災体制の育成と強化に努めてほしい、と思う。

といっても、市民に防災を強制するものであってはならない。市民が自発的、自覚的に防災に取り組んでこそ、自主防災体制と言い得るからである。そのためには、行政と市民との、防災における正しい分担関係、協力関係、信頼関係を打ち立てることが欠かせない。分担関係ということでは、行政の積極的に防災に取り組む姿勢があってこそ、市民の防災への積極性も生まれるものである。市民が行政任せにしてはならないように、行政も市民任せにしてはならないのである。地域の防災リーダーの育成や防災七つ道具の配備、さらには防災情報の提供など、市民が一人立ちできるよう後方から温かく支援する行政の姿勢がここでは求められよう。

なお、地域防災計画との関わりで言うと、計画の中に自主防災体制の育成やボランティア支援の計画を盛り込むことも大切であるが、地域防災計画そのものを市民に密着したものに作りかえる努力を怠ってはならない。そのためには、地域防災計画に市民の意見を反映させることはもとより、学区や生活圏ごとに市民防災マニュアルのようなものをつくり、市民の自発性が発揮される計画とすることである。

おわりに

防災計画が優れたものであればあるほど、人命が災害から守られ、被害の軽減がはかられることになる。市民生活の安心確保にもつながる。それだけに震災の経験を謙虚に汲み取り、世界に誇りうる素晴らしい計画が策定できるよう、市民的な運動の展開を期待したい。

参考資料一覧

1　宝塚市史　（宝塚市）
2　美 彩 都　（宝塚市）
3　宝塚市震災復興計画（宝塚市）
4　ＮＥＴわーく　（宝塚市）
5　ＦＵＳＩＯＮ　（宝塚まちづくり研究所）
6　統計季報　（宝塚市）
7　防災担当者の見た
　　阪神・淡路大震災（日本気象協会）
8　六甲山の地理　（田中眞吾　著）
9　地震を知る事典　（勝又　護　著）

協 力 団 体

1　阪急電鉄株式会社　創遊本部　創遊営業部
2　日本チバガイギー株式会社

あ と が き

阪神地区、淡路島を襲った兵庫県南部地震、この地震で得た貴重な体験と教訓を風化させることなく、今後の消防防災行政に少しでも反映できたらと震災２周年を迎えるにあたり消防活動の記録をまとめました。

この記録誌は、宝塚防火協会の絶大なご支援により、発刊することができたものであります。編集にあたっては、消防活動に明け暮れ、写真等の記録が殆どなく困難を極めましたが、貴重な資料を提供してくださった関係各位に改めて感謝の誠を捧げます。

消防業務のあい間を見つけての編集のため、いたらぬ点も多々あろうかと存じますが、今後の消防防災行政推進のための資料となれば幸いであります。

最後に防災体験を手記として寄せていただいた消防職・団員の皆さんと、貴重なご提言をいただきました、神戸大学工学部教授室崎先生に、心からお礼を申しあげます。ありがとうございました。

平成９年１月17日

＊　＊　＊

阪神・淡路大震災消防活動の記録誌作成委員会

委員長　古 村 宏太郎
副委員長　平 塚 忠 彦
委　員　市 場 通 行
〃　山 田 茂 樹
〃　宇 陀 公 正
〃　福 貴 正 文

阪神・淡路大震災消防活動の記録

発　行　宝塚防火協会
〒665　宝塚市伊子志3丁目14番61号
Tel (0797) 73−1141
編　集　宝塚市消防本部
阪神・淡路大震災消防活動の記録誌作成委員会
〒665　宝塚市伊子志3丁目14番61号
Tel (0797) 73−1141
発行日　平成9年1月17日
印　刷　やまかつ株式会社